「ヤア、金さんか」
和尚が聲を掛くる、金次郎は顏を振り上ぐる、その口を迸り出でたるは、
『寺方はお經ばかりと思ひしに、又神もあり佛もある』との一語なりき
歌にもあらず普通の詞にもあらず、彼は禪宗の問答を試みんとしつるなり、金瑞和尚と金次郎とは、曾て寒き冬の月夜に、利右衛門の墓地の前に立ちて、道を語りし以來、互に肝膽相照らして、暇あるごとに訪ね行き面白き問答を試むるを例としき、金瑞和尚も聞こえたる禪僧、金次郎に敗を取るものならねど、この問のみにははたと窮りて、暫く眼を白う黒うしたるが、やがて聲を鋭く
「何ぢや金次郎ぐらゐの者、五六十人來ても何んでもない」と喝破しつ
「うむ」と金次郎は微笑して、「和尚如きもの、幾人來ても差支え無い」
後には詞無く、金次郎は山路へ、和尚は里へ、右と左とに別れて、後には陽炎高く立ちぬ

（二）

「誰ぢや、今頃まで起きて居るのは」
納戸の中より喚き立つるは萬兵衛なりき、深け行く夜の淋しき土間に、金次郎は蓆敷きて、今まで草鞋を作り居たるが、亥刻の鐘を聞くと共に、大學の卷を繙きて、例の「此處ぢや〳〵」と會心の聲を漏らし居たりき
「私でござります」
「金次郎か」と咆哮しながら顏を見せて「おのれまだ書物を讀むな」
「亥刻から二時はお暇を戴いて居るのでござります、それに燈油は私が買ふて參つたのでござります」
「それは知とる、ぢやが喃、燈油が要らぬからとて、無用の學問するを見て居る理には行かぬのぢや」
「されば何うすれば好いのでござります」
「學問を廢めさつせへ、百姓に入用の無い本讀むのを廢めさつせへ」

「然し叔父樣、これが私の樂みでござります、叔父樣が每晩お酒を召し上る、それと同じ、私の娛樂でござります」

「今日からは二時の暇を取り上げる、本を讀む暇があつたら、精出して草鞋作るのぢや」

「へえ」とは云ひたれど、この詞に不平不滿の氣は滿ちぬ

「聞けば此方酒匂川の川緣を我物顏に菜麥を作るさうぢやの」

「爾う致さねばお小使の出どころがござりませぬ」

「そなたに小使が要るか、食ふ事から着る事、足の爪頭から頭の天邊まで乃公の世話になつて、これでまだ小使が要るか」と萬兵衞はむく〳〵起き上りて、例の鋭き眼を輝かせぬ

「お雙紙を買はねばなりませぬ、燈油も筆も調へねばなりませぬ」

「それ見よ、お前の小使といふのは、皆な用も無い學問の爲めに要るのではないか、學問さへ止めて了へば小使などは些とも要らぬ、今夜からは繩を綯へ」

「へえ」

「亥刻から丑刻まで一目も寐ず繩を綯へ」と頭ごなしに叱り付けて、再び納戶の中へ入りき

金次郎は背後を見送りて、無念の淚をはら〳〵と流したるが、やがて再び綯ひかけたる繩を取りて、掌の皮の腐爛るまでも綯ひぬ、家族、雇人、その他の者の鼾聲を聞きながら、唯懸命に繩を綯ひぬ、將た草鞋を作りぬ

かくて善榮寺の鐘丑刻を報らせてより、金次郎は又大學を繙きぬ、されど又萬兵衞の怒りに觸れんことを懼れて、左右の袖に燈火を掩ひたりき、納戶へ光りを見せまじとの用心なりき、從來は會心の章に至るごとに「此處ぢや此處ぢや」と獨語したれど、今はこの聲を漏らすべき勇氣も無かりき、唯密かに、唯靜かに、醍醐として讀み去り讀み來る、丑刻は天明に近し、寅刻過ぐる頃は早や家人起き出づ、この一時が金次郎の命なり、金次郎は眠るべき時だもなく、學問の爲めに盡しき

然も金次郎はよく此の苦學に堪へぬ、もし不幸にして性質弱かりせば、い

かに深き志ありとも、この艱難に堪ゆること能はざりしならん、天は金次郎に貧苦と健康とを與へて、光りある玉を成さしめ給ひき、萬兵衛の許にありて苦學せる間、金次郎の膽は鐵と錬れぬ、金次郎の骨は石と固まりぬ

天のほの〲と明け放るゝ頃、一人の飛脚は息を切つて來りぬ、

「御當家に金次郎樣お在でかな」

「金次郎は私ぢやが、お前は何處から來られたな」

「曾我別所の川窪樣から來ました、富次郎さんが甚う惡いに由つて、些とも早う來て下され」

金次郎は膽の潰れるまでに驚きぬ

「富次郎どう惡いのでござります」

「詳しうは知らぬが熱が高いと云ふことぢや、早う來て下され」

云ひ捨てゝ飛脚は走りぬ、幼く孤兒となりて他人の家に養はるゝ身が、不幸にも病となる、心の中推量りて金次郎はまづ袖を濡らす

（三）

打ち捨てゝは置かれじ、一日も早く病氣の狀を見、更にこの病兒を世話し下さる川窪の叔父樣に御禮申し上げねばなるまじ

金次郎は萬兵衛の前へ出でゝ、一二日の暇を給はるべき旨を賴みぬ

「何ぢや、富次郎が病氣ぢや」と萬兵衛は鼻頭で笑ひながら「それが何うした」

「態々お知らせござりましたゆゑ、これから見舞ひに參らうと思ひます」

「お前は醫者か」

「富次郎の兄でございます」

「兄が行けば病氣が治るか」

「病氣の治る治らぬは二段にして、弟の身に大病があると云へば、見舞ふて遣るのが人情かと心得ます」

「お前は私の家の厄介淡ぢや、一日稼いでも一日の雜用は取れぬ男ぢや、そ

れに弟が病氣といふては暇、書物を讀むといふては暇、さう〳〵暇ばかり取られて居ては、私の家の立つ瀬が無い、お前が見舞ひに行かずとも、治るものは治る、又お前が見舞ひに行つた處で、死ぬものは死ぬる、すれば時を費やすだけ、損を掛けられるのは乃公ばかりぢや、止めて呉れ〳〵」

「あア叔父樣は」と金次郎は烈火の如くに怒りて「弟の病氣を捨てゝ置けと被仰るのでござりまするか」

「いかにも爾うぢや、お前は富次郎の爲に私の家へ來て居るのぢや無い、お前にはお前の用がある」

金次郎は人に優りて健かに強き脚を持ちながらその進退の自由はなかりき、弟を思ふこと人に優れ且つ切なれば、その大患を訪ひ尋ねて一言の慰藉を與うべき機會は無かりき、彼の身體はみな萬兵衛の爲めに縛られぬ、萬兵衛否と頭を掉らば、それに對して云ひ爭ふべき詞さへ無かりしなり

「弟を見舞ふ暇で山へ行け、要らぬことに暇を費すよりは繩を綯へ、それが爲らずば何處へでも出て行くぢや」

これ萬兵衛が最後の惡言なり

金次郎は萬兵衛が出て行けといふ詞に從いて、餘ほど暇を請はんかと思ひぬ、されど一本立ちて一戶を維持し行くことの難きは、前に善右衛門の家を出て、三五月の間母及び二人の弟と同居せし時の苦しさにても知れぬ、もし人間に病氣なきものならば、砂を嚙みても獨立ちて行くべけれど、貧苦の上に病苦を重ねては、年弱き身の容易く世を送り行かるべきものにあらず、前の年の母の病氣、今目前に聞く弟の大患、理無き命令とは思ひながらも、今暫くは萬兵衛の詞に從ふ他無きを奈んせん、樹蔭を出でゝ雨に濡るゝが能にはあらず、富次郎の大患を餘所に見るは人情ならねど、足も心も縛られては詮術無し、曾我別所へ赴かんとせし足を、今日も木樵に山へ行くかな

切めては弟の病氣全快を神に祈らん、至誠を神の納受ましまさば、親しく病ひを訪はずとも、この心はやがて通はん、心だに通はゞ一念の誠をもて弟の病氣を快くすることを得ん

「それでは致し方ござりませぬ、私はやつぱり山へ木を樵りに參ります」

「云はずともの事、もうお陽さまお出ましぢや、早う行け〳〵」

金次郎は曉の霧やう〳〵晴れ行く處、馬を引いて萬兵衛の門口を出でぬ、道行く中も心に富次郎の病氣本復を祈りしが、氏神の森の前を通り掛りし時、華表の前に跪づきて

「南無八幡大菩薩、何卒弟富次郎の病氣を本復あらせたまへ、私今日まで貯へたお金を村の貧乏人に施します、その御利益を持ちまして……どうぞ富次郎の命をお助けなされて下さりませ」

誠ある善意善行には、必ずそれだけの應報あるべきを確く信じぬ、一方に他人を助くれば他の一方には必ず自個の苦痛を減ずべき援助あるべきを確く信じぬ、一貫文に足らぬ金なれど、金次郎の爲には幾百千金にも優りて貴し、善右衛門に預け置きたる九百文の金には、悉く金次郎の膏と血とが籠められぬ、その一錢には幾滴の汗、その一文には幾滴の涙、地に擲たば金聲あるべく、懐に抱かば粒々辛苦の叫きすべき、彼が勞苦の凝塊なりき、彼が艱難の產物なりき

然も彼はこの粒々辛苦の金を擲ちて、間接に弟の命を救はんと決心しぬ、栢山の貧民を救恤せる眞心は、やがて曾我別所の弟の上に通ひて、彼が病苦の幾分を減ずることを得ん

（三）

外には美しき花咲けど、裡には冷き涙滿ちて、戸細漏る風ひや〳〵と枕に通ふ、根太も傾きたる一室には、豆よりも幽なる燈火點りて、破れたる枕屏風の中に、眼は凹み頰は尖りたる一個の老婆打ち伏し居れり、年々の水害に傳來の田地は流され、家屋敷は悉く暴されつも、鰥寡生活の甲斐なさは、その挽回すべき手術無くて、憐れ今はその日の食事さへ爲し難ぬる貧民の群に入りぬ、酒匂川といふ恐しき大惡魔に圍繞せらるゝ栢山村の中には、年ごとにこの老婆を見る如き不幸人の一人二人を出さぬはなかりしなりき

この老女が唯一人の姪おきのは、足柄下郡足柄村大字堀の內（父は中島彌野右衛門）より來りて叔母の病を見舞へるなりき

枯れたる骨を見るが如き茅屋、髑髏に皮を被せたる如き病婦、大風雨の過ぎたる如き家、淋しとも淋しく暴れたる中に、花の如なる佳人の來迎を見たるは、何處と無く懐しき者なり、一もと菫破垣の下に咲きて、暴れたる園自然の春に香るが如し

おきのは十六の春を迎えたる美人なりき

「この様にお患ひとは知らず、今日までお見舞ひも申さで過ぎたを、どうぞ赦して下さりませや」とおきのは叔母の顔を沁と視る

「よう來て下された喃、遠方といひ、この穢い茅屋へ、よく〱私のことを思ふて下さればぢや」と病婦は嬉しげに云ひかけて「然し、そなた家に用事があるのではないか」

「いえ〱二三日はお側に居て御介抱する筈、お薬はどうでござります」とおきのは忠實しく尋ぬる

「お薬どころかいの、お食事も思ふやうにはならぬわいの」

「このお患ひのにお薬もござりませぬか、栢山村には道齋様といふ名醫もお在と聞きましたに、さて〱氣疎い、こんな事ならお金の用意もして來るでござりましたを……お小使といふて眞の少し、あア何うしたものでござりませう」とおきのは心配さうに云つて「これから道齋様お尋ね申して、お薬戴いて參りませうかな」

「いや〱、それには及ばぬわいの、一昨日から一粒の御飯も戴かぬ身體に、お薬の利かう筈は無い、捨てといて下されいの」

「えゝ、一昨日から、それは何故でござります」と不審顔

「何故とてお前はまだ少妹ぢや、誰一人助けて呉れる者もない貧しい家に、お米のあらう筈は無い、お前が今日尋ねて呉れずば、このまゝ餓ゑ死する處であつたわいの」

「情無いお詞を聞きまする、定命なれば致し方ないと諦めもござりませうが、召し上るお米が無うて、それが爲に餓死などゝ、承はるも涙でござります」とおきのは襦袢の袖で涙を拭いて「もう〱其様なこと被仰つても下さりまするな」

「ぢやが今云ふたのは眞實ぢやわいの、年々酒匂川の堤が切れて、恐しい水が村人の命を流し行くわいの」

「其樣な土地なら何故早うお轉りはござりませぬな」

「倅でもあれば外土地へ移轉すにも力があるが、何をいふにも女の手一つで、どうすることも爲らぬ中、此やうな身になつて、死ぬるのを待つより他、仕方の無い態となつた、世に女ほど賴りのない者は無い、良人に離れては田地田畑が力、その田地田畑に離れては一人で身を擡へることも協はぬ、貧乏な女のうしろには不幸の影が付く、そなたもどうせ良人を持たねばならぬ身ぢやが、腹帶を强う締めて、何から何まで用意して掛らねば、私のやうな身に爲らうぞよ、若い時はちやほやと云ふて吳れる者もあるが、甘い口には針がある、親切らしい言葉の底には僞言がある、人間の身に僞言ほどの惡魔は無い、女の第一に選ばねばならぬのは、良人の心、良人の性質、私を活きた手本にして再びこんな境遇になつて下さるな、破れた壁から訪れるのは、冷たい風ばかりでござるよ」

「叔母樣、まづ御飯炊いて上げませうな、お藥よりは御飯急ぐ要があるかも知れませぬ」

「お米を皆にして居りますぢや」

「一度や二度のお米買ふぐらゐ、お小使を持つて居ります、つい米屋まで一走りに行つて來ませうわいな」

「何んの〳〵」と老婆は骨ばかりの手を掉つて「枯木のやうな私の身に肥料を與るに、花の姿のお前を使ふては罰が當る、それに暗夜、もう〳〵捨てといて下され、私はお前が斯うして心切に尋ねて吳れたのを、歡んで死ぬわいの」

「いえ、私は悅びませぬ、叔母樣の爲めになら何處へでも參ります」とおきのは愈よ忠實しう「米屋は何方でござりまするな」

(四)

此時、冷い風より外、訪れる者無しと恨ちたる壁の破れより、ことりと轉

げ込みしものあり、おきのは駭いて「おゝ」と云ひさま、氣味惡げに身を縮める

「何ぢや、何んぢやぞいの」と老婆は凹みたる眼を光らせぬ

「何やら落ちて參りました」とおきのは其處に轉り居れる黑き物をすかして見て「や、これはお鳥目でござります、叔母樣お鳥目でござりまするよ」

「えゝ」と老婆は點頭いて「お鳥目が……はて鳥目が落ちて來たといふぢやの」

「これ御覽じませ」とおきのは不審しげに取り上げて「二百五六十文でござります」

「鳥目などの落ちて來やう筈はないに……さて〳〵不思議、どうしたのであらうの」

おきのは燈火を掻き上げて、この不思議の銅錢を視詰むる、この前へ再びばたりと落ち來りしは、白木綿の袋に容れし一升餘の白米なりき

「呀、叔母樣」と叫びたるおきのゝ聲は慄へり、宛ら物怪に魘はれたる如き聲は慄ひて「不思議でござります」

「復、不思議の音したの」

「お米が落ちて參りました、これ御覽なされませ、この樣なお米落ちて參りました」

おきのは戰慄ひながら其處に落ちたる米袋を拾ひ上げて、病婆の前へさし出しぬ、病婆は唯惘れに惘れて、愈よ眼を圓うしぬ

「不思議、不思議、こりや何事であらうぞの」

「此方にはお米、此方にはお金、鼠の引いて來たとも思はれぬが、何として落ちて來たでござりませう哺」

「南無大慈大悲の觀世音菩薩、私の不幸をお憐みと見ゆる、有難いことかな、辱いことかな」と瘦せたる手を直と合せて「南無阿彌陀佛々々」

「私、圖ずも叔母樣御許へ來合せて、この不思議の御利益を見まするも、宿世不思議の因緣と心得まする、これといふも叔母樣御信心、佛陀のお心に感應したでござりまする、早うお禮を仰せられませ」

「飯泉の觀世音菩薩、御利益顯著でおはします、そなたも共に……」
「私もお禮申し上げまする、叔母樣お寐みのまゝでようござりまする」
「いや〳〵此まゝでは勿體無い、起してたもれいの」
「宜しうござります、唯今お起し申しまする」とおきのはまづ銅錢と米袋とを煠ぶりたる佛壇の中に供へて、やをら叔母の脊を抱き起さんとする時、
「それは爲らぬ、爾うしては病氣に障らうぞよ」と不思議の上にも復不思議の聲は聞こえぬ
「や、彼のお聲は」
おきのは片手を叔母の身に掛けながら、片手を膝の上に置きて、きと聲する方を見遣りぬ
壁は落ちて竹の骨現に、風習々と吹き入る間より、淸きこと秋の夜の星にも比ぶべき二個の眼は、幽なる燈火の光りに映りて、きら〳〵と輝き居たりき、おきのは聲を勵まして
「誰方でござりまする」

心強く問ひ掛けつも、恐しさにわな〳〵と胴慄えす
「私ぢや」と聲は淸く「今お米とお錢とを進ぜたものぢや」
「あ、叔母樣」とおきのは叔母の方を振り向いて「飯泉觀音樣御示現でござりまする」
「有難や、觀音樣の……」
慌てゝ身を起さんとしたれど自由ならざりき
「早うお拜みなされませ」
「おゝ寐て居ては勿體無い、たゞ一目拜み奉る、早う起してたもれいの」
おきのは心得て再び病人を抱き起さんとする、壁の破れより見ゆる雙の眼は愈よ光りて
「觀音では無い私ぢや、拜むには及ばぬ、その儘にしてござれ」
「あのお詞、あなた誰方樣でございます」
おきのは再び問ふ、その聲に應じて
「金次郎でござります、お澤さん、金次郎でござりまするがな」

お澤は病婦の名なりき

(五)

「金次郎どの――はて金次郎どの……」

「萬兵衞の御厄介になつて居る、金次郎でござりまするがな」

「お〻」とお澤は飛び付くやうに「利右衞門樣のお子かいな」

「覺えて居て下されたか喃」

「金さんなら覺えて居るが、今お錢とお米とを投げ入れて下されたのは、やつぱりお前樣でござつたか喃」

「いかにも私ぢや、其の些細で何の補足にもなるまいが、それで溫い粥の一碗でも炊いて下され」

「はて金さん」とお澤は自由に動かぬ身體を悶えて「そなた何として、此樣な物、私に惠んで下さるのぢや」

「ちと心願がござります、お錢は三百文に足るや足らず、お米は僅か一升ほど容れてあるでござりまするが、それでも今の身分には一生懸命の物でござります、どうぞ受けて下さりませ」

「受けいでかいの、受けいでかいの」とお澤は淚に濕りながら「お由どの逝られてから、萬兵衞どの家の厄介になつて在らしやると聞いて居る、その不自由の手許で三百文のお錢、一升の白米、大體な物ではござるまいに、何の心願があつてか知らぬが、よう助けて下されたの」

「觀音樣にお禮を被仰るお心があるなら、どうぞ弟富次郎の病氣全快をお祈りなされて下さりませ、これがお願ひでござります」

「はて富次郎どの――と云ふと曾我別所の太兵衞さんへ預けられてござる仁ぢやの」

「へえ、その弟が大病でござります」

「やれ不憫さうに、私どもとは違ふて稚木の花ぢや、助けて進ぜたいものぢやのう」

「今朝わざ〲報知ては下さりましたが、一本立でない身の悲しさは、一日

の日も自由に他へ行くことは協ひませぬ、」

「是はさて、他の事とは違ふに、萬兵衛どの見舞ひに遣ては下さらぬぢやの」

「唯身を恨むより他ござりませぬ」

「そなたまだ若いに、甚う苦勞をさつしやるのう」とお澤はいよ〳〵聲を濕らせて「弟大病の見舞といふに、一日の暇も遣らぬのは、萬兵衛どの思ひの外に無慈悲ぢやの」

「いえ叔父を恨むことはござりませぬ、男兒と云れて一本立ちの身と成らぬ、身の不甲斐なさを恨むのでござります」

「それにしても私はそなたが不憫い、あア何うすれば好いであらうの」

「弟の病氣全快を祈つて下さりませ、人の難義を助けるは、弟の病氣を助けるも同じと存じて、一年近く骨身を碎いて貯めたお錢を、難義な衆へ施して歩くのでござります、お錢やお米は少うても、私の眞心は大きうござります、弟の病氣全快を祈つて下さりませ、こゝからお願ひ申します」

「祈るとも〳〵、世に永へて益のない私の命、私の身を犠牲にしても、富次

郎どの命乞ひをしやうわいの」

「有難うござります、そのお詞を承はつて私は手づから弟の介抱をしたやうに心得ます」と金次郎は活々と嬉しさの籠る聲で「このお蔭で弟の命助かりましたら、これからお金を貯めてに、難義の衆へ施します」

「何といふ感心な心掛けであらう、その心掛け一つでも、富次郎どのゝ病氣は快くなる、心配さつしやるなや、決して〳〵心配さつしやるなや」と今にも死すべき澤の詞は、血氣盛りの金次郎を慰めて「今夜のお助け、觀音樣の御利益よりも有難う受けるわいの」

「これからまた一二軒救助に廻ります、お前も病氣を大切になされませ」

云ふ聲のみ壁の破れより通ひて、金次郎は早や彼方へ去りぬ、この間おきのは夢路を辿るが如く惘と坐りて、一圖に金次郎の云ふ處を聞き居たるが、びた〳〵と路を踏む草履の響き、次第に遠く爲り優るを聞き送りつゝ、我にもあらず立ち上りて、緣の雨戸を引き開けぬ、折から月は東山の頂を出でゝ、淸袮冴ら燦るが如く見ゆる間を、金次郎は足早やに走り去る、この後姿を見

送れるおきめゝ眼、おきのゝ顔、一は情に燃ゆるが如く、一は懐しさに紅さして見えたりき

（六）

誠に輝く眼の光りは、巨巖の底に置かれたる玉をも射貫く、況して人の病ひをや、仍況して肉身の病氣をや、金次郎の誠はやがて富次郎の身に屆きて、さしもの大患も見る〳〵中に快くなりぬ、太兵衛の歡びは更なり、仲兄の三郎左衛門も全く神の御利益と滿足の眉を開きぬ

富次郎は床を放れて、日南の好き緣側に遊びてありき、三郎左衛門は病める弟の心を慰めんとて、反古紙に鶴、三寶、蛙の兒などを折りて與へぬ、時は午時を過ぎて、風の和ぎたる田舍道を此方へ歩み來れるは美しき美人なり「ちよと物をお尋ね申しまする」と入口をさし覗きて「此方に富次郎樣お在でござりまするか」

三郎左衛門は遂に見も馴れぬ美人が、弟の名を呼びて、訪ね來れる不思議

さに目を圓うしつゝ、まぢ〳〵と女の顔を見詰るのみ答へなかりき

「此方川窪太兵衛樣でござりまするな」

「太兵衛樣は此方ぢや、お前何處からお來でなされたな」

「私は栢山から來たものでござります、富次郎樣お在でござりまするか喃」

栢山はその身の故鄕なり、雙親に死別れてはこの外に賴む人も無き兄金次郎の在す處なり、三郎左衛門は眼を光らせつゝ

「何か御用でもござりますか、富次郎はこれ、私は兄の三郎左衛門でござりまする」

「おゝ、それでは」と美しく水も滴る如き目に沈と視入りて「富次郎樣もう御病氣は御全快でござりますか喃」

「お陰樣で此通り、まづ八九分は本復してござります」

「夫は何よりもお芽出度う……嬉しいことを聞きまする」と風呂敷に包みたる菓子折を取り出して「これは眞の粗末の品、お見舞ひのしるしにお受けなされて下さりませ」

「何かは知りませぬ、お心にお掛けなされて、有難う頂戴致しまする」と三郎左衛門は推し戴き「栢山は故郷、親共の知人も澤山にござりまするが、態々お見舞ひ下されたお方とては無いに、あなたお名前を何と申しまする」

「私はおきの――」と花の如き眼の縁を眞紅にして「よう覺えて下さりませ、足柄村堀の内彌野右衛門の娘おきのと申すものでござります」

「それでも今栢山の者と、仰せなされたではござりませぬか」と三郎左衛門は不審しぬ

「生れは、足柄村でも、心は栢山に通うて居ります、承はれば御舍兄金次郎樣、御用の都合でお見舞ひもなさせられぬといふ、御兩親にお別れなされては、唯一個の兄上樣お力、その兄上樣お見舞ひもなされいでは、さぞお心細い事とお察して、私御名代に參つたのでござります」とおきのは伏目勝の頬を紅うして、判然と云ひ放ちぬ

「あなた兄とは御懇意でござりまするか喃、私栢山から當地へ參つて足掛け三年、懷しい故郷の事も近頃は忘れ勝でござりまするが、

――金次郎樣には唯一目お目に掛つたばかりでござりまする、なれど私大切な叔母の命、金次郎樣お情に助けられた大恩忘れ難く、金次郎樣に爲り代つて、富次郎樣の御病氣お見舞ひ申すでござりまする」

おきのは是を冒頭にして、叔母お澤が窮苦の中へ、米と金とを惠まれたる事情を物語りぬ、叔母は金次郎樣お情に由りて、幸ひに一時の饑渴を免るゝことを得、それが回復の緒口となりて、今は六七分までも命を此方へ取り止むる、是然しながら金次郎樣のお蔭、その大恩を報ふには富次郎樣の御病氣御回復を祈る他無しと心付いて、叔母は飯泉の觀世音へ百日の起願、私は金次郎樣に爲り代つて、假令幾十日が間にても、御介抱の眞を盡したさ、親共の許可を受けて、今日遙々參りたれど、早や御快氣とある上はそれにも及ばず、斯う急かに御本復あらせられたも、金次郎樣眞心の感應、それは申すまでも無いが、叔母と私とが丹誠に丹誠を抽んで、飯泉の觀音樣を起願した、その御利益の千萬分一、富次郎樣お身に添ふたかとも心得まする、足柄村中島彌野右衛門の娘おきの――之を何日までも御記憶、爲らば兄樣へお傳へも

下さりませ、と女の口には思ひ切つたる口上、然も羞明げなる有様、その目の中に耀いて見えたりき「お澤さんは私もよう知つて居りまする、その御親類のおきの樣――忘れは致しませぬ、兄に對面もあらば、きと御芳志を傳へるでござりまする」

「どうぞお願へ下さりませ、私これほどに思ふ眞の片端でも、金次郎樣お胸に達けば、何よりも本懐でござりまするに……」とおきのは火の如き顔を背けて、表の方を見遣りたりき

「富次郎よ、この姊樣にお禮云ふぢやぞよ、兄上の代りに足柄村から態々お見舞ひ、その上この樣な好いお菓子下された、ちやつとお禮を申すぢやぞよ」

富次郎は小く痩せ細りたる手を突きて

「姊樣、有難うござります」

「その樣に被仰つて下さるほどの物ではござりませぬ」と漸う常の顔の色に復つて「さらば御暇致しまする、此上ながらお大事に……御緣おはさば重ねてお目に掛ることでござりませうぞ」

おきのは後に心の殘る樣なりき、まだ十分には云ひも盡さぬ心の誠が、影ともなり形ともなりて後に殘る如感じき

第八章

（一）

酒匂川の堤防は年々決潰して、其度ごとに栢山一村の基礎を危くし、幾多住民の財産を押し流す事幾許といふ數を知らざりき、それに伴れて川緣不毛の土地を開墾し、麥、粟、菜種等を植ゑ附け、多少の收益を見んとする金次郎の耕作地も幾度大波濁流の底に沈みたるかも知れず、されど又この洪水が不思議にも金次郎に無上の幸福を與へたる事ありき、そは一年の大洪水に幾多の用水堀流失して、堀筋の變りたる事なり、堀筋變りたる爲め、古堀の多くは不用となりつ、半ば砂礫に埋められて、用ゆる處もなき荒蕪の地となりつ、一方に川緣の耕作地を失ひたる金次郎は早くもこの古堀不用の地に目を注けつ、これ正しく天より授けられたる賜物なり、この地を拓きて耕作地となさば、三苞五苞の米を收め得んこと容易ならん、三苞の米は輕微なれど、以て一家の土臺とすべし、以て家名再興の一着手とすべし、金次郎は莞然と

して腕を揮てり

　萬兵衛の家事に服役する他、多少の餘暇あらば書を讀み字を習ひ、尙更に多少の餘暇あらば古堀砂礫の地に鍬を入れて、熱心に開拓の勢を採りつ、而も一二反の開拓を終りたる時、恰も田植の時機となりぬ、金次郎は稻田の彼方此方を探し廻りて、他家の捨稻を拾ひ取りては、そを自己の田圃に移し植ゑ、日ごとに成育を待ちたりき、親戚の家に食客と爲れる身に肥料を求むべき手段なければ、唯熱心に耕耘に從へるのみ、熱心に水を灌ぎ、草を苅りて、他の爲る幾十倍の世話を辭せずば、假し十分の肥料を與へずとも、稻は必ず成育してそれに相當せる收益あらんと信じたりき

　夏は早や中旬となりぬ、いら〳〵と煎り付く如き暑き日は、午時の半晌一晌を晝休として與へらるゝが例なりき、他の雇人作男はこの時間を待ち難ねて、南風凉しき大樹の下、又は草の葉淸き庇の蔭、思ひ〳〵に褥を作りて、華胥一睡の夢を貪れど、夜さへも四時以上熟睡みたることなき金次郎が、いかで貴き晝の間を寐て暮らさん、彼はこの暇を利用してその身の耕作地に手

を入るゝなり、いかに燒くが如き暑き日も、金次郎は一瞬時を空しくせざりき、彼は誠心誠意に敵すべき暑は無しと信じぬ、誠心誠意に敵すべき苦寒も又無しと信じぬ

　靑田の上には淸き風吹き渡り、さら〳〵と神の囁きを聞くが如き微な響きを遠くに傳へて、見るから潔き稻の葉は活々と戰ぎ動くなりき、この葉、この幹、一として苦辛の籠らぬは無し、これの卽て成育して、美しき實を見ん時、彼はこの甚しき勞苦の總てを忘るゝならん

　彼は今日も晝休の時刻を利用して、靑田の草を取るべく來りぬ、田の水は湯の如く沸き立ち、畦に生へたる靑草は暑熱の爲めに枯死するが如くに見えぬ、されど金次郎は物ともせざりき、菅笠被りて今しも靑田に足を入れんとする時

　「やい〳〵」と鈍く太き聲を掛けて、土手に繁る柳の陰より現はれしは貫四郎なり、午餐の膳の一杯に醉ひたるさま、肥え膏切たる頰を紅くして「おのれぐるり一遍、この靑田を何うするのぢや」

「あなた貫四郎樣でござりまする喃」と金次郎は儼として「暑いに何處へお越しなされます」

「何處へも行かぬ、村中をのさばり歩いて、田を盜む惡黨を退治せう爲めぢや」と熟柿臭い息を吹き掛けながら「おのれ此田を何うし居るぞ」

「それは御苦勞樣でござります、あなた方のお見廻りが無うては、村中が草原になつて了ひませうぞ」

「えゝ」と舌鼓一つして「それを云ふのぢやない、おのれ此青田を何うしやう心で居る」

「少しでもお米取らうと思ふのでござります」

「それは知れて居る、誰に斷つてこゝへ稻を植ゑ付けたの」

「誰方にもお斷り申したのではござりませぬ、御存じの通り去年の洪水で、堀筋が變りまする、古堀は皆な不用の地となりまする、おまけに砂や礫で一ぱいに埋つて居りましたを、私一生懸命に開墾したのでござります」

「おのれ誰の許可も受けいで、村の土地を使ひ居るな」

「廢れた所を興すのは自然の道でござります、砂礫で埋められたまゝに捨て置けば、そのまゝ廢物になつて了ひまする、それを斯うして私の丹精で、一本の稻でもおろせば、多い少いは扨て置き、白いお米を穫ることが能きまする」

「又利口振て理窟を云ふの」と貫四郎は冷笑ひながら「いかに口が達者でも、村の物を我物顏に使うて、それから物を穫らうとする橫着な仕事を云ひ瞞める事は爲るまいぞよ、村役人の端にも列る貫四郎が承知せぬ、この青田、村へ返せ」

誠に降て湧いたる災難とはこれが事なり、砂礫の底に埋もれてありしを、唯單獨の力にて之だけの上田にするには、幾度血の涙を流したるかも知れず、上田にしたるを能く馴らし能く耕して、他の捨稻を拾ひ取り移し植ゑるまでには、幾度血の汗を絞りたるかも知れず、この一二反の青田はまこと金次郎の命、將た金次郎の魂、將た金次郎の太陽なり、いかに苦しく悲しきことありとも、一たび此青田の青々と潔き風に對すれば、心自然清々しくなるを覺

え、いかに勞役に疲れたる時も、一たび此青田の成育好き稻の葉を見れば、心自然に休まるを感ず、今もし貫四郎の手にこの數畦の稻田を奪ひ取られなば、金次郎は暗然なり、金次郎は死ぬるべし

「いえ」と金次郎は詞強く「この田返す理はござりませぬ」

（二）

「何ぢや、返す理が無いと……村役人に一言の斷りも無く、村の地面を使ひながら返す理が無いとは何んの事ぢや、一二も要らぬ、四五も要らぬ、此まゝ乃公の手へ渡せ」と貫四郎は愈よ威丈高なる

「廢たれた土地を興すに、他樣の許可を受ける法はござりませぬ」と金次郎は身も動かさず「他の廢てた敝れ草履を拾ふに、前の持主へ斷わる馬鹿漢はござりませぬ」

「はゝゝ」と例の絞り出した笑ひを見せて「怜悧いやうには見えてもまだ子供ぢや、敝れ草履と田地とを同一にしをる」

「物に差別あつても、理に差別ござりませぬ、道に捨てた草履拾うて、壁すさを作るものは幾許もござります、廢れ物を拾うて有用の途に使ひこなすは、人間の誠の道と申すものでござります」

「いや、何んといふても爲らぬ、そなたが何といふても此田地使ふことはならぬ」

「稻は私が植ゑたのでござります」

「稻はお前の物にしても、肝腎の田地が村の物では仕樣が無い、稻が欲しけりや拔いて行け、この田地は村へ收める」

「左樣な理不盡、私は肯きませぬ」

「肯かぬとて肯かせずに置かうか、この田地に一寸でも手を觸えたら、村の掟で處刑するぞ」

「村の掟が正直漢を處刑するに定つてあるものなら知りませぬ、私は當八幡宮の氏子、處刑に遭ふやうな惡い事は致しませぬ」

「うぬ、まだ云ふか」

「幾度でも云ひますする、道理の爲めには死を以ても爭ひますする」

「土手坊主のぐるり一遍、村役人に向つて長い舌廻し居る、その分では措かぬ、其處退け」

「退きませぬ」

「どうあつても退かぬな」

「眼の黑い中は退きませぬ、私の身體に道理の付き添ふてゐる中は退きませぬ」

鐵は捩ぢべく、石は轉ずべし、されど金次郎の心は動かざりき、道理の上に置きたる心は、村役人の權柄を以て動かざりき、貫四郎もし舌をもて來たらば、彼も又舌をもて爭はん、貫四郎もし腕をもて來らば、彼も又腕をもて鬪はん、彼が丹精に丹精してこれまでの良き田に仕上げたるを、理不盡に奪ひ取らるゝ如き世の儘ならば、金次郎の望みは遂に成る時あらざらん

金次郎は命にかへて、この青田は渡すまじと覺悟しぬ

「おのれ何うあつても渡さぬな」

「幾度云ふても同じことでござります、私の舌は唯一枚でござります」

「よし、その舌の根を拔いて吳れう」

貫四郎の右手の拳は宛ら鐵の如く硬められて、金次郎の頭の上へ落ち來りぬ、されど金次郎の心の敏捷きは、貫四郎の手の速きよりも速かりき、ひらりと身を躱して

「あなた何を爲されます」

「橫着漢を懲らすのぢや、田地盜人の頭の鉢を割て吳れるのぢや」

「どッこい、爾うはなりませぬ」

金次郎は已に平和の人たること能はざりき、彼の眼には殺氣滿ちぬ、好みて事を構えるにてはなけれど、理の爲めには飽くまでも奮鬪せざるべからず、貫四郎再び鐵拳を揮ひ來らば、我も又それに應ずる一拳なかるべからず、金次郎は一歩すさりて、血走りたる眼をきつと睜りぬ

「おのれ抵抗するな、村役人に抵抗するな」

貫四郎の聲は額を迸り出づるが如く疳走りて聞こえたりき

彼一撃、これ一撃、撃ちては開き、開きては復た撃ち、金をも鑠くべき日の下に、二人は汗を流して闘ひぬ、金次郎は二三人に敵すべき大力、貫四郎も亦弱き方にはあらず、撻々と力足を踏み鳴らして撃ち合ふ時、遠くより斯くと見て、韋駄天の如く駈け付けしは善右衛門なり

「待たう〳〵、二人ともに待たう」

（三）

善右衛門は此村の豪家にして且つ勢力家なり、二人の間へ割て入りて

「待たう、云ふことがある、暫く待たう」

貫四郎の横暴を以てするも、善右衛門の前には羊なりき、沒趣祕しに大笑ひしつゝ

「善右衛門さんか、や、飛んだ所を見られたの」と云ふ中に手を收めぬ、金次郎の面の上には不平の氣滿充

「これはさて大人氣ない、相手は金次郎　や　いか」

「私でござります」と金次郎は息を機ませながら「道理の爲めに爭ふたでござります」

「もう好い〳〵、鴉は黑いと斷らずとも、鷺は白いと云はずとも、眼あるものは知つて居る」と眼顏で金次郎を和めつゝ「貫四郎どの、こりやお酒の上ぢやの」

「まこと面目も無い」と流石に少しく愧ぢ入りながら「この樣なキ印を相手に、拳振り上げたのは宜くないが、眞の道理は私にある、善右衛門さんも村の事には隨分骨を折らつしやるが、この田地を誰の物ぢやと思はつしやる」

「異なお尋ね、これは古堀の跡ぢやござらぬか」

「さ、その古堀ぢや、古堀は誰の物でござるかの」と貫四郎は疊みかける

「誰の物といふて、根が不用の荒地、主といふてはござらぬ、然し金次郎の丹精で、砂や礫はみな除られる、後を斯う耕作して稲を立派に植ゑたとありや、金次郎の物も同樣ではござるまいかの」

「そりや爲らぬ、この古堀は村の物ぢや」

「はて村の物と云はるゝ、假し村の物とも爲、砂礫の底に埋めては、稗一本の收穫もあるまいを、金次郎の丹精で、此通り美しい青田となる、すれば村の貨が一つ増えたのぢや、假へ收穫れた米が村の物にならずとも、この青田が再び砂礫に埋らぬ間は、村の貨に算へることが能きるぢやござらぬか、此方も栢山の貫四郎ぢや、高がキ印のぐるり一遍を相手にして、拳を揮ふといふがござるか、ちと嗜まつしやれ」

「すると此方は金次郎が村の田地を我物に使用する、それを大目に見やうぢやな」

「少でも上に立つものは、慈悲善根を第一とせにやならぬ」と善右衛門は平和に抑へ付けて「一たん流れた古堀をこれまでに仕上げるは、尋常や一様の事ぢやござらぬ、些とは金次郎の働きも察して遣らつしやれ」

「ほう、ほう」と貫四郎は惘れたやうに息を吐いて「善右衛門さん、キ印が甚い贔負ぢやの、此樣子で行くと終には氏神の境內へ麥作らうかも知れぬ、そも大目に見さつしやるか」

「其時は其時、金次郎にも考えがござらうわいの」

「氏神の境內に麥作つて宜けりや、キ印にさせる迄は無い、私の手で畑にする、どうぢや、一二はあるまい」と貫四郎は傠叽る

「まアさ、此方は田地持ちぢや、金次郎とは身分が違ふ」と善右衛門は詞強く云ひ切つて「さて金次郎、そなたの丹精が稻の上に見えて來たの」

「へえ」と金次郎は頭を下げて「これも皆樣のお蔭でござります」

(四)

「此方も親には死に別れる、家の物は流される、萬兵衛殿の厄介になつて居るやうでは、一苞の米を作る土地も無いであらう」

「誠にお恥かしいことでござります」

「時代とは云ひながらそなたの先代はこの村の草分、栢山一ケ村に生活を立てるもの、氏神へ參詣した歸りには、お前の家の前に蹲踞んで、假へ一文の賽錢でも投げるのが至當ぢやが、今の人はそんな事に錢はづむ事をせぬ、て

れが他人の田地を荒らすのでは無し、不用の廢れ地を耕作して、米の一苞も作らうといふ志、手助けこそせね、誰が故障を云ふものぢや、今貫四郎どのが四の五のと意地惡う云はれたのは、要りお前の心を引いて見る爲めぢや、のう貫四郎、お前金次郎の心を試さうと爲されたぢやの」

「まづそんな物でござらうかの」と貫四郎は所在無さに、畦の小石拾うては青田の中へ投げ入れ居たりき

「それ見さつしやれ、貫四郎も其のお前の心を試したのぢやと云ふて居る、人間も最初は斯うと見込みを付けて、一生懸命に遣つても見るが、中途で一つ故障が入ると、何のことは無い嫌氣になつて、折角仕上げかけた物を、惜し氣もなく廢てるものぢや、其處を貫四郎が考えて、一寸心に探りを入れたのぢや、氣にさつしやるな、心配さつしやるな、今日にでも庄屋殿に逢ふたりや、お前の事を味好う話して、古堀は扨置き、川縁の不用地、貫四郎が今云ふた氏神の垣外、少しでも耕作の爲きる所は、みなお前のまゝになるやうな都合を付ける」

いかな艱難にも堪へ、いかな迫害にも恐れず、自分の信ずる處に進み、自分の思ふ處を行はんとする金次郎も、善右衛門の厚意にはほろりと泣きぬ、涙の玉と迸る中より

「有難うござります、唯有難うござります」

「石も研けば光りが出る、不用の古堀も手の入れやうで上田になるの」と善右衛門は心に感じながら見て「お前の誠心が現はれて、稻の葉に恐しう光澤がある、誰か手傳うものでもあるかの」

「誰方の力も借りぬ心でござります、私は自分の力で家が興したいと存じます」

「それで無うては爲らぬ、その心で無うては爲らぬ、此處で穫れた米が土臺となつて、二宮の家再興を見ることとあつたら、草葉の蔭の利右衛門殿、どれほど歡ばッしやらうのう」と云ふ中に考えて「あア何日であつたかな、私が朝早うこゝを通ると、村端處のお澤婆々が、精出して草を採て居るのを見たが、お前は知らッしやるまいの」

「へえ」と金次郎は驚いて「左樣なことがござりましたか喃」
「まだ全然本復せぬと見えて、顏の上に窶れはあつたが、それでも忠實に草を取て居るのを見た、世にも不思議なこと、どうしたのであらうの」
貫四郎は又側より口を出しぬ
「善右衛門さん、此方その理知らッしやらぬか」
「一向知らぬ、貫四郎は知てかの」
「その位の事知らいで、村役人は勤まらぬ、高が斯うぢや」と得意顏に進み寄つて「お澤も又一畝の田地さへない貧乏人、キ印の古堀に米を作ると聞いて、一二升の分前欲しさに、田の草を手傳うたのぢや」
「いや〳〵、それなら最初に挨拶して手傳う筈ぢや、誰も知らぬ朝の間に、潛れて來よう筈はない、金次郎心當りはないか」
「お澤さんは義理堅うござります、少しの事を恩に被られるでござります」
金次郎は涙に暮れつゝ、お澤が九死一生の大患に惱み居れる時、少しの金と、少しの米とを惠みたる　る由を物語りぬ、善右衛門は横手を拍て

「爾うあらう、爾うありさうな事ぢや、さうした不思議の扶けを受けるも、要り此方の心懸けが好いからぢや、道理で稻の葉色が好いと思ふた、金で雇ふた人間の一日より、誠心の助けをする人の一時が、作物には驗が見える、お澤は定命を過ぎた老人、然も病氣揚句のよろ〳〵婆ぢやが、それでも仕事する手に誠がある、この葉の色を見さつしやい、この通りに光澤があるではござらぬかの」
實に善右衛門の云ふが如く、肥料も十分なるまじく、手入も思ふやうにはあるまじき古堀の稻の葉は、他の上田の稻の出來榮えに比べて、優れりとも劣るまじき色光澤なりき、成育なりき
流石の貫四郎も此樣を見たる時、驚きの眼を睜りたり

(五)

善右衛門も去りぬ、貫四郎も去りぬ、後は午時過の野面を吹く一掬の淸風なりき、天地の間に瀰蔓せる金次郎が誠實の心なりき

彼は只管に善右衛門の厚意を歡びぬ、今より庄屋殿に面會して、村内不毛の地に鍬鋤を入れんとも、誰とて異議を唱うるものなきやうに扱ひ置かんと云はれき、これ豈大いなる援助にあらずや、これ豈望んで得難き援助にあらずや

善右衛門様のお詞を庄屋どの背き給ふ筈もあるまじ、善右衛門様仰せの如く、村内不毛の地の何れにても開墾し得べき自由を得ば、あらん限りの勞力をもて、來年は更に多くの稻を作るべく、來々年は更に〳〵多くの稻を作るを得ん、斯くして小を積みて大を爲すを得ば、萬兵衛様の手を放れて、廢れたる家を起すを得べく、二人の弟を手許に引き取りて、同胞が同じ處に、父様母様の御位牌を拜み奉ることを得ん

金次郎の望みは氏神の森に懸る陽の光りよりも大きく輝きぬ、彼は善右衛門の後姿を伏拜みながら、水田の中に足を入れんとする時

「兄様、兄様」と遠くより聲掛けて馳け付けしは三郎左衛門なりき

「こなた三郎か」と金次郎は駭きながら「何として來やつた喃」

「兄様、兄様」と繰り返し息を機ませて、逢ひたうござりました」

「それは私も同じ事ぢや、然し幸福惡う他様の御厄介になつて居る身が、我儘なことをしては爲らぬに、そなた叔父様のお許可受けて來やつたか喃」

三郎左衛門はこれに答へ無く、きよと〳〵と圓き眼を睜りて、兄の顔を視上げたりき、金次郎も亦懷しき弟、戀しき弟、夢寐の間も忘れ難ねたる弟、星の如く輝く眼を沈として、三郎左衛門を視おろしき

我の勝氣なるに異りて、三郎左衛門は極めて順柔なる性質、われが進みて尺を得んとするにも、三郎左衛門は寸を得たるに滿足して、之を失はじと守る性質、われの強きに反りて彼は弱く、われの硬きに反して、彼は軟かく、われの學問に身を委ぬるに反して彼は十分一だも其志無し、されど心は愛らしく行爲は正しく、情には厚く、涙には脆きが、暫時見ぬ間に見違えるほども成人しつる、頰の肉は瘦せたれど、眼の色は清しく、髮の光澤は乏しけれど、唇の色は鮮かなり、今年十六の瞼皮に子供の如き涙を浮べて

「叔父様へは申し上げずでござります」

「えゝ、叔父樣へ沙汰をせいで、自儘に私を尋ねて來たぢやな」

「兄樣」とおろ〳〵して「富次郎はまだ全然と快うござりませぬ」

「それにしてもお世話になる叔父樣のお許可を受けず、無斷でこれへ來る法は無い、私はそのやうな規律の無い事が甚い嫌ひぢや」

三郎左衞門は恨めしげに兄の顏を見たれど、詞は無くて潸々と泣き出しぬ

「富次郎病氣であらうとも、道に外れたことをしてはならぬ、お前は川窪の叔父樣に御厄介を掛けて居る身では無いか」

「叔父樣は私を奉公に出すとお云ひなさります」と三郎左衞門は又泣きぬ

「そなた奉公に出るが悲しいか」

「私は兄樣と一所に、以前の家へ歸りたいと思ひます」

「時期が來れば歸ります、私は一日も早うお前や富次郎を手許へ引き取りたいと思ふゆゑ、これ見よ、この暑い日中を晝休みもせず田の草を採る、この田から米を穫り、その米を又田に植ゑて、遂にはお父樣の家を興さうと考えて居る、その望みを遂げる爲めには、他から打擲されたこともある、キ印の

土手坊主のと、惡口雜言せられたこともある、子供の時から奉公に出たことも、幾度あるか知れはせぬ、然し私は一度も辛いと思つたことが無い、一度も人を恨めしう思つたことがない、奉公すれば奉公をするに付き、他の御厄介になれば御厄介になるにつき、その時、その日、その折の分を守る、それが人間第一の愼みぢや、太兵衞樣がお前を奉公させやうと被仰るには、奉公に出さねばならぬ理があるに違ひない、世話になる叔父樣はそなたの爲めに父上も同然ぢや、いかに辛いお詞があつても、お背き申しては濟まぬ、奉公に行けとお云ひなされたら、何故云ふことを聞いて直行かぬ、もし叔父樣が父上であつて、父上が奉公に行けとお云ひなされても、そなたは否といふて逃げるか、假令私がこの村に居るでこそ、そなたは私を賴んで歸る、私がここに居なんだら、そなた何處へ逃げる氣ぢや」

「それでも私は…………」と三郎左衞門は涕涙を啜つて「奉公が嫌ぢやもの」

「否では濟まぬ、この世の中は好なことばかり爲る所で無いのぢやよ」

「兄樣、兄樣」と三郎左衞門は彈かれたる兄の袖に縋らんとして、幾度か口

曇りながら「兄様が行けとお云ひなさるなら、私行かぬことでござりませぬ、けれど私が奉公に出ては、富次郎が不憫さうでござります」

「富次郎には富次郎に従いた運がある、そなたが心配するには及ばぬ事ぢや」

「それでも私が居らいでは、誰も介抱して遣るものがござりませぬ」

（六）

「そなたが居ずとも、川窪の叔父様、伯母様も在らせられる」

「伯父様も叔母様も、田の草取りが忙がしうござります」

「それでもお仕事の間々に、御介抱下さらぬ筈は無い、假し富次郎がその為に死なうとも、叔父様の仰せ付けを背いてはならぬのぢや」

「御奉公に行くのでござりまするか」

「何ういふお方をお主に持つか知らぬが、奉公しては忠義を旨と……誠の一字を頭に戴くぢや、すれば必ず惠みがある」と金次郎は心強う云ひ切つて「叔父様御心配なされうに、早う歸れ」

「はい」とは云へど三郎左衛門は仍去りかねて「兄様、いつ家へ歸るのでござります」

「その様なことを尋ねるには及ばぬ」と金次郎は白い歯を見せんともせず、「今日は允すが、この後もし叔父様のお許可を受けいで、私の側へ歸つたり為やつたら、其分では置かぬ、それ限り兄弟の縁を切つて、再び言葉を交すことではない」

「兄様、恕して下さりませ、私もう歸ることござりませぬ」

「きつと歸らぬな」

「兄様に見捨てられては、私何處へも行く處でござりませぬ」

「奉公にも行くか」

「はい、何處へでも行きまする」と咽び泣きに泣きながら「その代り、從來のやうに物を云ふて下されや」

「そなたさへ道を守れば、天にも地にも血統といふては兄弟三人ぢや、物を云はいで何んとしやうぞ」

「兄様、恕して下さりますか」と一歩進んで「もう機嫌直して下さりまするか」

「今にお父様の家を興せば、お前も富次郎も一つ鍋の物が食へる、それを樂みに叔父様を大事にするぢや、主を持たらその旦那様を大事にするぢや」

「兄様、富次郎病氣の時、何故見舞ふては下さりませぬ」

「心だけは通ふたが、身體には暇が無うての」と金次郎は何となく胸の迫る心地して、「叔父様、お腹立であつたらうのう」

「甚う御立腹でござりました」

「爾うあらう〳〵、二人の弟を御厄介掛けながら、九死一生の大病といふに見舞ふても遣らなんだ、お腹立ちは御有理ぢや」

「兄様、何故來ては下さらなんだ」

「萬兵衞様の御用が多うて、つい一日の手も引けかねたのぢや」

「萬兵衞の叔父様、お暇下されぬでござりましたな」

「人様のお情で活きる身はそれが辛い、そなたも早う一本立ちになる工夫せねばならぬぞよ」と云ふ目の中に一ぱいの涙ありき

「病氣見舞ひにお暇下されぬとは、叔父様無慈悲なお方でござりまするな」

「これ人を恨んでは爲らぬ、人を恨むのは、誠の人間の爲ぬことぢや」と涙の目に叱り付けて「早う歸れ、遲ふなつては罪に罪を重ねるも同様ぢや」

されど三郎左衞門は兄の側を離るゝに辛かりき、兄の傍を離るゝに悲しかりき、何をか語り出して少しにても此處に止まりたき心を見せつゝ

「けれど兄様の名代に、美しい姉様お在でなされて、叔父様お歡びでござりました」

「や、私の代りに………思ひ掛けぬ、そんなこと無い筈ぢや」

「無い事でござりませぬ、お澤さんの親類といふて美しい姉様、富次郎の見舞ひに來て下された、その時、小田原の町に賣る良いお菓子、土産に下されたでござります」

「はて心得ぬ、お澤どのゝ親戚といふて………」

「足柄の人でござります、忘れてはならぬお名はおきの殿、眞に優しい人で

ござりました」

金次郎には多少の記憶あり、さらば彼の夜、お澤の枕頭にありて、忠實しく介抱し居たる女、僅の恩誼に感じて、富次郎の病氣を見舞ひたるものならん、其後再び救助の米與うべく、彼の茅屋を訪ひたる時も、美しき姿をちらと認めき、然もこの時、他に世話する者ありて、今は米にも、お金にも事缺かず、これは他の難澁なる人に與へ給へとて受けざりしは、彼の乙女の救助ありしが爲めと見ゆ、僅の恩を恩としてお澤が朝まだきにこゝの田の草を採り呉れるさへ、案外の報酬なるに、おきのとか云ふ女、更に曾我別所の弟を訪ひて、われの代りに病氣を見舞ひ呉れたりとは、姿のみならず心までも美しき人なり、今の世にも斯る人あるべきか

金次郎は斯く思ひつゝ、心にお澤の茅屋を伏し拜みぬ

お澤の茅屋は幾町歩の青田を隔てゝ、遠き彼方の森の蔭に蕭然たりき

「もう好い、もう何を聞く要もない、歸れ、歸れ」

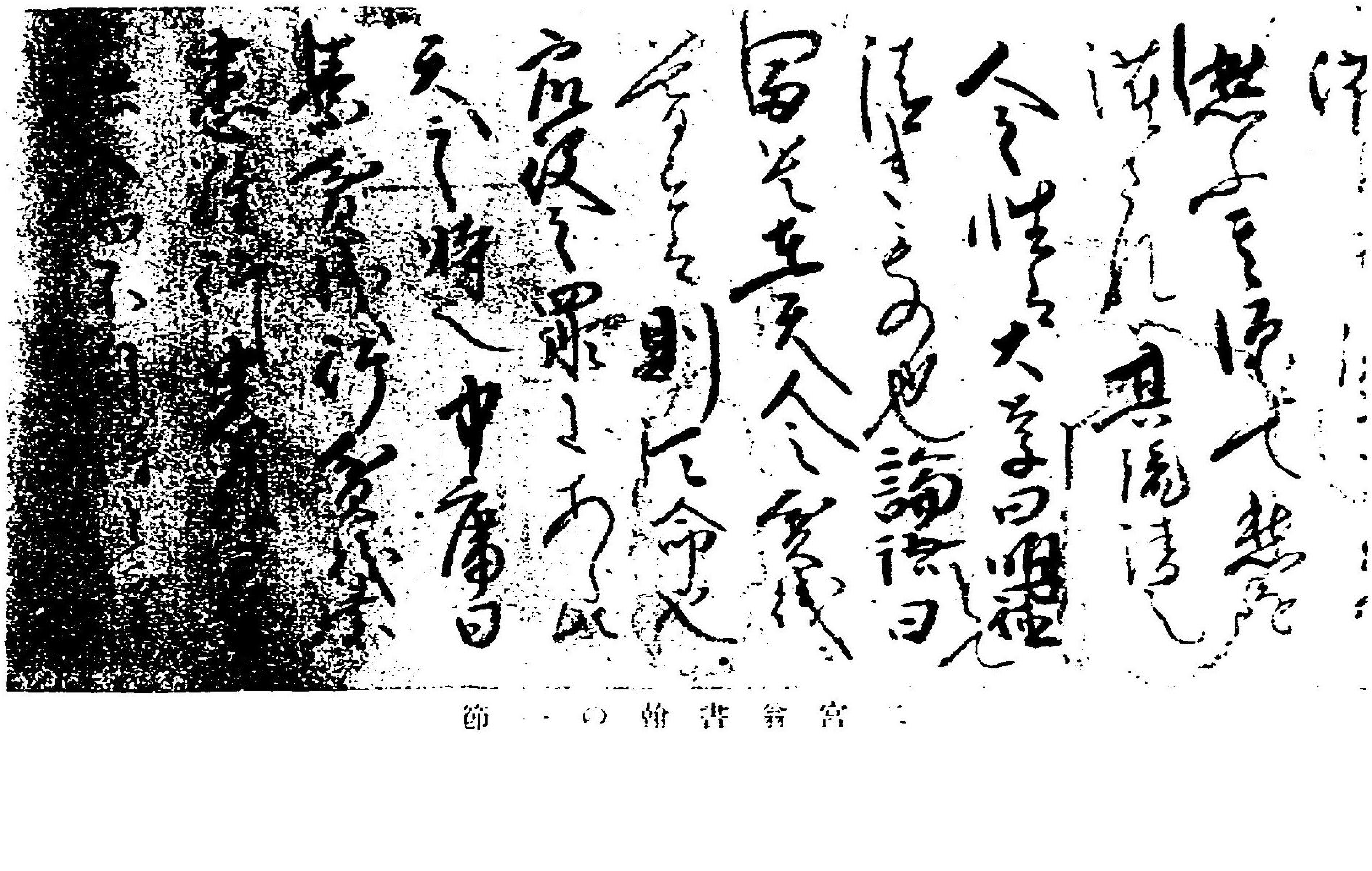
「はい、唯今歸りまする」

「何日まで居ても限はないに…………あれ見よ、お陽樣はもう森の上に傾いて在らせらるゝ、そなたの爲めに今日は草を取る暇を潰した」

「もう未刻でござりまするか」

「時を聞く要はないに、とつとゝ歸れ、道草を食ふて居てはならぬぞ」

追ひ立つるやうに云ふ聲は鋭く、目には熱き涙迸りて、泣く〳〵歩をかへす三郎左衞門の袂には、幾許ありしか、一緡の銅錢容れられき



二宮翁書翰の一節

第九章

(一)

金次郎は絶えて貧困を恐れ且つ悲みたる事なかりき、勇往邁進只管に修養せば、富貴榮達は期せずして來るべしと信じき、由てその主意を以て弟三郎左衞門を諭し、更に村内の貧窮人を勵しき、同時に彼は口の人にあらずして腕の人なりき、百千言の空理よりも、一事の實行實現を貴みき、古堀不用の地、もしくは瘠地不毛の田、もしくは神社佛寺の垣外、酒匂川の川縁、苟くも鋤鍬の容るべき土地あらば、悉く彼の手に拓かれて、米、麥、野菜の耕作地と爲されき、斯くて彼はこの新田新圃の收益をもて、第一に鰥寡孤獨の救助に充てき、而してその餘れるは悉く善右衞門の手に預けて、小の積りて大とならん日を待ちき

彼は唯農をもて身を立てんと決心しき、農家に生れたる身は、農をもて家を興すが先祖への孝行なりと思惟しき、然もその耕作耕耘には彼一家の仕方

を用ひき、彼一家の仕方とは、誠意をもて耕作するなり、他は肥料を頼みて米を作れど、彼は唯誠意をもて米を作りき、誠意ある耕作は肥料ある耕作よりも良き結果あるを信じたりき

　彼が始めて古堀に米を作りし時は、一苞餘の收入に留りしが、その一苞を資本として、更に廣く耕作地を拓きし爲め、翌年は二苞餘の收利を得き、二苞を四苞とし、四苞を八苞とし、八苞を十六苞とするは、空手に一苞を得るよりも容易く、彼が二十五歳の春を迎えし時、善右衛門に預けたる金子積りて一家を持ち得るまでとなりき、十餘年の勞苦は積り〳〵て一家獨立の基礎を作り上げたるなりき

　彼は歡びて萬兵衛の前へ出でつ、萬兵衛は相變らず苦り切て控えたり、されど金次郎が長年御厄介になりたる禮を述べ、いつまで當家の御世話にはなられまじく、家へ歸りて家業を興したき旨願ひ出でたる時は、流石滿面に笑を作りて

「さうか、それは手柄であつたの、世話をしたとは云ふ者の、お前が食ふだけはお前が稼いで呉れたのぢや、禮を云ふて下さるには及ばぬ、私もお前がそれほど立派な人間になつて呉れたかと思ふと、利右衛門殿の御位牌へも鼻が高い」と意外に手輕き言葉なりき

　金次郎は萬兵衛が此詞を聞くまで、今突然暇を取ると云はゞ、必ず多少の故障を云はん、其時は善右衛門樣のお聲を借りても、此志を貫かねば止むまじと覺悟したるが、思ふには似ず快く承諾き呉れたるに心折れて、思はず嬉し涙にかき呉れながら

「十年御養育の大恩、私は死ぬるまでも忘れませぬ、それでは今日限りお暇を下さるでござりまするか」

「おゝ此樣に芽出度いことは無い、私の仕方に就いては、お前も氣に入らぬことがあつたであらうが、長の間よく我慢をして呉れた、百姓に青標紙讀ますのは、害こそ有れ益は無いと思ふたが、それも結句私の思ひ違ひであつた、學問も仕樣に由つては百姓を利益する、お前は好い手本を見せて呉れた、お前の爲めに私はどれほど益を得たかも知れぬ、よくそれまでに爲て下された、

祝ふて一盃進ぜうの」

金次郎は益々意外に驚きぬ、恐しき蛇、恐しき蝎と思ひたるは僻目にて、その舌に黄金の色ありき

「有難うござります、お盃は戴きませいでも、私は唯あなたのお詞に滿足します、是からは子とも弟とも思し召して、可愛がつて下さります、足らぬ處はお引き廻し下さりませ、私に弟はあつても、兄も親もござりませぬ」

（二）

天晴れて風長閑に、雲雀の鳴く音美はしき日の午時過ぎなりき、金次郎は其身の所持に屬する衣服調度を抱えて、我家へ歸る

家は以前のまゝながら荒れに荒れて足を踏み入る所とてもあらざりき、父が臨終の涙を注ぎたる室には、白き絲長く掛りて蜘蛛の巣も空しく、母の柩を置きたる座敷には、古き泥露の如く落ちて燕の巣跡も無し、前栽には雜草繁りて、一筋の徑も絕え、緣側には名も知れぬ花咲きて一羽の蝶香に飜へる、

金次郎は彼を見、是を見て、暫時は茫然と佇みたるが、第一着手として佛壇の塵を拂ひぬ、この身を置く室はなくとも、先祖代々、父母の御位牌を安んじ奉る處なくては協はず、まづ佛壇の塵を清めて、缺けたる蠟燭に火を點し、銹びたる花瓶に草花の一枝を手向けて、十年來一日も肌身も離さず持ち居たる父母の位牌を安置し、宛ら活きたる人に言ふが如く

「長らく御窮屈な目をおさせ申しました、今日はお蔭樣で以前の屋敷へ歸りましたも、皆御先祖の御餘光でござります」と、丁寧に挨拶し終りて、更に他の室の掃除に掛りつ

軒に囀り鳴く雀の聲は、十年前の長閑さに渝りなく、古き友の恙なく歸りたるを歡ぶ態嬉しげに見ゆ、池の蛙は心なく落花を蹴れど、春の帝の御嗔せもなく、破れたる垣を拔けつ潛りつする鶯の聲は、幼き時に聞き覺えある例の笹鳴きなりき、金次郎はまづ掃除、まづ草刈、續いては破損修理、續いては用度調達、斯くして漸やく烟を揚ぐるに至るまでに、殆んど十日餘りを費やしつ

直に二人の弟を曾我別所村より迎え取らんとしたるが、有り餘れる手許にはあらず、迎え取るが否な、家計の苦しきに泣かせんよりも、當分は獨居、儉約に儉約し、精勵に精勵して、一たんの田地にても買ひ戻し、然る後芽出度く迎え來るとも遲きことはあるまじと心に思ひぬ、由て日は終日田畑を耕し、夜は夜もすがら繩綯ひ草鞋作りて、醫師道齋に借財となり居たる一兩の金子を返し、次に貫四郎の手より父の賣りたる田地を買ひ戻し、然る後三郎左衞門と富次郎とを呼び返しぬ、當時三郎左衞門は他家に奉公の身、富次郎は例の脆弱く病ひ勝ちにて、久し振りに見たる兄の顏へ、淋しく力なき涙をはら〱流しつ

獨力をもて廢たれたる家を興す者已に稀なり、況して古き先代の借財を返すものをや、古き先代の賣りたる田地に、利息をつけて買ひ戻すものをや、仍況して弟を迎え取りて、その病を看護する眞心をや

「どうしてキ印ではないぞ、土手坊主ではないぞ、ぐるり一遍の間に考えたる彼の遠慮は、キ印ならぬ普通の人間の到底及び難きものであつたぞ、彼を

惡口雜言した駕夫は、今も仍淺ましい姿して他の身體を擔ぎ居れど、彼に罵られたる土手坊主は殆んど栢山の名物男と呼ばれて、一本立の人間になつたるぞ、」と人々は皆な感嘆の舌を捲きぬ

この噂はそれからそれへ傳はりぬ、已に家を興して自立の道を得つるからは、早く女房を迎え取りて、名譽ある二宮家の後を擧げよ、これ即て孝行の第一義にてはなきか、と萬兵衞まづ勸めぬ、太兵衞まづ勸めぬ、續いては作兵衞、續いては善右衞門、續いては道齋、唯善榮寺金瑞のみは「欲しい時貰ひなされ、急ぐことではあるまいに」と澄ましたものなりき

金次郎は漸く家を興したりといふのみ、漸く自立の道を得たりといふのみ、金瑞和尚の云ふが如く、妻などは急ぐにも及ばじ、その中に良き縁あらば話をする、とて二年ほど打捨て置きたるが、二十七歳始めて合卺の式を擧げぬ、橋渡はお澤婆、媒介人は善右衞門太兵衞、而して新婦は彼の足柄村中島彌野右衞門の娘おきのなりき

おきのゝ戀は初めて成就しぬ、おきのは伯母お澤の病ひを訪へりし夜、金

次郎の世に優れて情深き仕方を見て、さて頼母しき殿方よと思ひ初めぬ、頼む心は戀となり情となりて、遂にこの合卺の盃を擧ぐるに至りき

「お前は何と思ふて私の家へ嫁入に來たな」

これ金次郎が第一に新婦おきのに交したる詞なりき

（三）

おきのは唯顔を紅らむるのみなりき、婿殿の口より斯る口上を聞かんとは、世にも思ひ掛けぬことなりき

「私の家は此上もない貧乏人ぢやが、それを知らぬことはあるまいな」

疊み掛けて問はれて、おきのは僅に口を開きぬ

「お金持とは思ふて居りませぬ」

「お前は私がお澤さんにお金を上げたことがあるで、隨分金子を持つて居るぢやらうと思ひ違ひして居るではないかな」

「左樣なことを思ふては居りませぬ」

「思ふてさへ居ねば好いが、私の家には一文の金も無い、これから一枚の衣服作るにも、一本の釵を買ふにも、又一畝一歩の田地を買ふにも、自分の腕から稼ぎ出さねばならぬ、それも承知であらうのう」

「私は何んな辛い働きでも致しまする」

「お前ばかりを働かせやうとは云はぬ、要りが一家苦樂を共にするぢや、承知であらうな」

「悉く承知でござりまする」

「お前は、貧乏を不幸とは思ふまいな」

「そんな事思ふては居りませぬ」

「それなら好いが、もし貧乏を不幸と思ふ樣ぢやと、私の心と心が違ふゆゑ、盃をしたばかりで離縁致さうと覺悟して居る」と金次郎は膝の上に兩手を置いたまゝ「どうぢや、確乎と返事をさつしやれ」

「貧乏を不幸とは思ひませぬ、けれど又幸福とも思ひませぬ」

「はゝ」と金次郎は妻の答へが氣に入りたる如く笑ひて「勿論幸福ではない、

ぢやが貧を恐れぬ心で稼げば、富貴は自ら來るものぢや」

「どうぞ困らぬ身分になりたいものでござりまする」

「私には二人の弟がある、一人は正直漢、一人は病身、正直漢は何かに付けて鈍い、私が助けをして遣らずば、今の處自立も致し得まいと存ずる」

「私は肉身の弟と思ふて大事に掛けます」

「病身の弟は仍更に手數が掛る、この介抱はそなたの役ぞや」

「皆な心得て居ります」

「私は正しい人が正しい意味で難儀するのを、知らぬ顏で見て居る事が能きぬ氣質ぢや、假し三度の飯を二度に減しても、爲きるだけは助けて遣りたいと思ふ、そなたは何うぢや」

「私も御同心でござります」

「時には衣る物を脱がすこともある、食ふ物を減らさせる事もある、皆な承知か」

「唯あなたのお心に任せまする」

「私は人間の道——卽ち道德ぢや——道德を穩かに行つて、さうして一家を興さうと考へる、世の中に金を貯める人はある、けれどさういふ人は得手人の道を踏み違へる、又一方には一生懸命に人の道を踏まうと心懸けるものがある、けれど爾いふ人は必ず貧しい、富と人の道とは車の兩輪も同じこと、私は富んで而うして人の道が行ひたいと思ふ、これが私の目的ぢや」

「結構なことでござります」

「いかな困難も自分の力で打ち勝つ、いかな利益も自分の力で收める、決して他の力は借りぬ、決して金の前に頭を下げぬ、これも承知か」

「承知でござりまする」

「義の爲めには一命をも捨つる、生れは百姓で心に古武士の魂を宿してある、そなたもその心で無くてはならぬが……」

「及ばずながら私も驥尾に從くでござりまする」

「心に祕密を持つな、暗い處を避けて明るみに出よ、身を節して他人の爲めに盡せ、過ちては改むるに憚るな、強いものに恐れず、弱いものを劬はれ、

これが私の家の掟ぢや」

「心得てござります」

「交りに始終を全うせよ、起きるにも寐るにも誠の一字を忘れるな、誠のない世はお陽様も暗うあらせられる、これが私の宗旨ぢや」

「心得てありまする」

「分に安んじよ、業を勉めよ、己を責めて人を恨むるな、德を以て德に報う、これが私の心の奥義ぢや、分つたか」

「熟く分りました」

「それが分れば眞の盃ぢや、今の盃は眞の表面ぢや」

折から冬の夜、外には玉の如き霰、娑々として窓を撲ち來る

(四)

おきのは姿も心も優れて美はしき女なりき、櫻の花のぱッと開きたるが如く、美はしき女なりき、出でゝは農事を勵み、入つては家事を扶け、金次郎の命ずる處に從ひて忠實しく働きゝ、されば金次郎の家には、富次郎病身と云ふを除く外、此といふ不足なくて過ぎぬ、不足なき家には必ず多少の剩餘あるが普通なり、これと目には見えねど金次郎は富める身となりつ、冬至過ぎたる日が一線づゝ長くなり行く如く、金次郎の家は少しづゝ富み行きつ、少しづゝにても富める方へ向へるは、何處と無く長閑に且つ樂しきものなりき

金次郎の家は小人數なれど賑かなりき、日として笑ひ聲の聞こえぬはあらざりき

善右衛門は小紋の羽織の裾短かきを被、善榮寺和尚は墨染の法衣に、錦襴の輪袈裟掛けて來りぬ、善右衛門は一月ほど前より、殆んど日ごとに訪れ來りて服部家救濟の事を頼み聞こえぬ、されど仍承諾の返答を聞かねば、今日は金瑞和尚を加擔人に賴みて、何かの儀式の外着たることなき小紋の羽織を被て來りぬ、金次郎は愛嬌好く迎えて、まづ白湯の微溫きを薦めたりき

「時に金さん、今日は和尚さんを助太刀に賴んで來た、どうしても聞いて下さらねばならんぞよ」

と善右衛門は重い調子

「服部樣の一條でござりまするか」と金次郎は笑ひながら「毎度同じことを繰り返して濟みませぬが、私は百姓でござります」

「その百姓にお武家樣が手を突いてお頼みとある、神武以來無い圖ぢや、聞いて進げさつしやれ」と金端は事も無げに云ふ

「和尙樣は輕々しうお云ひぢやが、此方と問答するやうに手輕うは行かぬ、服部十郎兵衛樣は小田原十一萬石の御家老ぢや、千三百石の御大身ぢや」

「いかに大身でも、高が百姓に手を突いて身代の回復をお頼みぢや、すればお前よりもずつと目下ぢや、目下の者を助けるは目上の役ぢや、聞いて遣らつしやれ」

「お前もこゝを能う合點さつしやれ、」と善右衛門は膝を前むること一尺、急に白うなつた鬢の上に簾漏る日光を受けて「此方も今では一本立の身、押しも押されもせぬ男一匹ぢやが、それでもまだ家の名を興したといふまでぢや、常にお前のことを女の敵見るやうに惡口する貫四郎を土下座させる事なるまいかな、お前は貫四郎の惡口を口惜しう思はつしやらぬか」

「口惜しう思ひます、一生の中には彼の頭を抑へる身になつて、先祖の耻辱を雪ぎたいと念じて居ります」

「それならば仍の事、何故服部樣のお頼みを聞いて、身の功を顯はさぬのぢや」

服部十郎兵衛は小田原十一萬石の領主大久保加賀守忠眞朝臣の重臣なりき、世祿千三百石を知行して、代々忠良の名隱れ無かりしが、家事不如意、借財積りて千有餘兩に上りたれば、今はその利息の爲めに逐ひ倒されて、貧窮殆んど骨に達しき、親戚、藩友、額を鳩めて救濟の道を講ずれど殆んど策の出る處を知らず、或は借銀の爲めに一家斷絕の悲みを見るに至るならんといふ、此時家中の一人、不圖金次郎が極貧の身を以て、一家を再興したる事情を聞き、太夫もし眞に當家の急を救はんお心あらば、宜しく金次郎の義氣に縋らせ給ふべし、彼の非凡の手腕は、三五年ならずして必ずお家回復の功を見するならん、と告げぬ

十郎兵衛はこの事を聞きて、天偶われを捨て給はずと歡びぬ、金次郎幸に當家の爲めに一臂の力を貸し呉れなば、當家は再び春風の惠みに遭ふことを得ん、と枯れたる樹の芽を吹きたる如くに歡びぬ、由て八方に便宜を求めて、遂に善右衞門の口を借るに至りたりき、善右衞門は金次郎の舊主、金次郎の恩人、善右衞門の云ふことならば、必ず枉げてもその詞に從ふならん、と是も一人の注告ありしに由りたるなりき、善右衞門が日ごとに金次郎を訪へるは是が爲めなり、されど金次郎は容易に從ふべき氣色も無かりき

(五)

「皆樣、その樣に被仰つては下さりますが、これは容易の事でござりませぬ、私は根が百姓、それゆゑに農をもて家を興したのでござります、百姓一卷の事ならば、何かど心得もござりまするが、武家の作法は頓と存じませぬ、それに服部樣は御家中第一の御大身、借財の爲め御家名に疵の付くまで御困窮遊ばすは、要りが武士の家を治むる道をお踏み違へなされたからでござります、百姓の道とお武家樣の道とは、大した相違もござりますゆゑ、これは平にお斷り申します」

「ぢやが喃金さん」と金瑞は口を出して「お武家も米を食はれるぞ」

「百姓は麥を食ひます」

「米と麥との相違はあるが、それで生を繋ぐのは同一ぢや、武士と百姓と家業は違ふが、踏む道は一筋ぢや、百姓の家を興した筆法で、武士の家も必ず興される」

金次郎は手を叉んで考えぬ、軒場に鳴く雀の聲喧し

「今のお前の口上、先日も聞いたに由て、詳しう服部樣のお耳へ入れたぢや、處が服部樣のお言葉には、その答へを聞いたゞけでも、金次郎の志は察しられる、金次郎の手に掛つて一家回復の道立たずば、われは天命と諦めて、直ちにお暇を願ひ出る、當家を立つるも金次郎、當家を潰すも金次郎、服部家の存廢、たゞ金次郎の心一つにあると、斯樣に仰せぢや、お前も百姓の家に生れて、御家老樣のお見出しに預るは、此上もない譽れでないか、どうか

私の顔も立てゝ下され」

金次郎は仍返答無かりき

「金さん」と金瑞は眞面目になつて「お前、御領内の百姓としてお上の御恩を忘れてはござるまいの、服部様は御領主大久保様の御家老職で在らせらるぞや、その御家老のお家が借金の爲めに斷絶しやうとして居る、お殿様御本意であらうかの、萬々一の事あつた時、お殿様に傷の付くことあるまいかの、そなた一人の事ではない、大きく云へば小田原十一萬石のお名にも關はることぢや、よく考えさつしやい」

金次郎はきつと頭を擡げぬ、その目は日光を受けて爛々と閃めきぬ

「善右衛門様にも和尚様にも、お手數を掛けて澄みませぬ」と凛としたる聲

「私の心は決してござります」

「それでは服部様のお頼みを聞き入れて下さるぢやの」

「私の心は決してござります、然し家内はまだ何も知りませぬ」と金次郎は沈着いて「暫時お待ち下さりませ、一應おきのと相談するでござりまする」

それは有理ぢや、熟く相談して下され」と善右衛門はやゝ安堵したりき

「これ〳〵」と金次郎はおきのを呼んで「ちよと來てたもれ、大事の相談をせねばならぬ」おきのは間の襖を開けて、優かに入り來りぬ、一朶海棠花開いて、園内忽ち春なりき

「和尚様來らせられませ、善右衛門様來らせられませ」

金次郎はおきのが二人へ挨拶するを待ちて

「そなた今の話を次の間で聞いて居たか、服部十郎兵衛様、私の様な貧乏百姓を態々お召し出しといふ、服部様のお家にもしもの事あつては、お殿様の御威勢にも關はる、すれば身を粉に碎いても、服部様の御難儀をお救ひ申さねばならぬが、そなた何と思ふ」

「外ならぬお二方の仰せ、殊にあなた御出世の緒口ともなる事、お引き受け遊ばすが宜しからうと存じます、私、無事お望みをお遂げ遊ばすをお待ち申すでござります」

「あア良く云ふた、そなたに其心があれば私も安心して行かるゝ、留守居萬

端氣を付けてくれねばならぬ」

「お歸りは何時でござりませうな」

「五年の間には、きつと仕方を付けて歸るわ」

「えゝ、五年と仰せござりまするか」

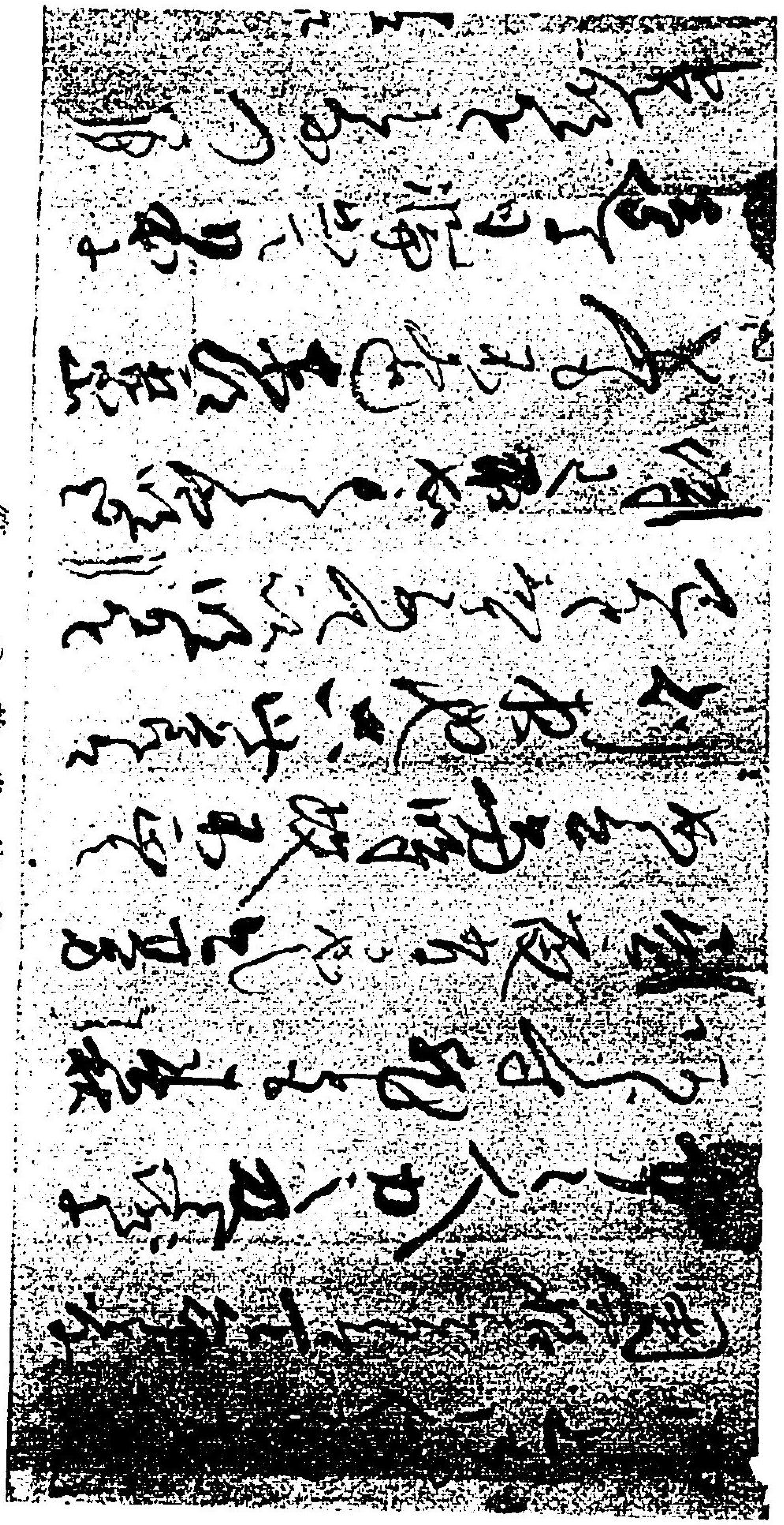
おきのは案外期限の長きに驚きぬ、千三百石の基礎に龜裂は生きたりとも、金次郎殿日頃の手腕をもて處理したまはゞ、いかに長く見積りても一年の外には出でじと思ひたるが、意外にも五年の春秋を要すべしとは沙汰の限りなり、女の若き身を以て五年の間をこの廣き家に獨り暮らさんは耐ゆべき事にあらず、又女の手に一家の經濟を維持し行かんは容易にてもあるまじ、一たんは承知の旨を答へたれど、つく〲思ひ返したる故をもて、更に故障を云ひ立てんかと思ひしが、いや〲然にはあらず、武士の身にて云へば戰場の初陣なり、功名手柄の爲樣に由りては、莫大の御知行も下されて、千三百石のお家、良人の手に回復の實擧らば、御褒美には何を下さるべき、士分お取り立て何百石の御知行頂戴、それが爲らずばお金子にて何百兩、歸には錦を

や被たまふらん、五年の月日は長くとも過ぎて見れば夢の間なり、五年の辛抱、後の樂みに比ぶれば九牛の一毛なるべく、これは此方より云ひ勵して、多くの下男下女に奥樣と呼ばるゝ果報の早く來るを待つ方得分ならんと思ひ返し、花見る如き面に莞爾と笑顏見せつゝ

「僅か五年――五年の間にさしもの御借財、御方付きになさせらるゝ、御苦勞の深きに比ぶれば、私お留守居の役、恰で寐て暮らすも同じことでござります、申すまではなけれど、少しも早う御出府、少しも早う始末付けてお歸りなされて下さりませ」と女にしては凜々しき答へなりき

「おきのどの善う云ふて下された、お前のその詞がどれほど金さんの力添へ、になるかも知れぬ、何のお前五年や六年、私も和尙も付いて居る、そなたや富次郎の食ふぐらゐ、私の手から立派に貢ぐ」と善右衞門は歡びの眉を開き、この草深い栢山からお前のやうな立派な人間が現はれやうとは、御領主樣も御存じあるまい、砂の中から夜光の珠とはこれ、このやうな芽出度いことはない、暫時の別れに、和尙樣般若湯はどうでござります」

善右衛門は我事のやうに歡びぬ、和尚も滿悦限りなかりき



二宮翁書翰の一節

第十章

（一）

翌日金次郎は單身小田原の城下へ出でゝ、直に服部十郎兵衛の屋敷を訪ひき

十郎兵衛は大旱に雨を得たる如く歡びて、取る物も取り敢ず奥の一室へ招じ、衣服を改めて對面しき、一方は領主の重臣、一方は渺たる百姓、普通の資格より云へば、同席だも協ふまじき身分なれど、禮を厚うして招待したる人なれば、金次郎は正面に無手と坐を占め、十郎兵衛はやゝ引き下りて對坐しつ、圓々肥えて眼光尋常ならぬ百姓は、手織木綿の着物に、石持の紋付きたる小紋の羽織を着て、威儀を亂さず着坐せる前には、瘦せて丈長き四十五六の武士、黒龍紋三所紋の小袖に、白羽二重の衿幾襲ね、黒羽二重の羽織着流して悠然と坐を占むる、一應の挨拶終りて後、

「よくお入來下された、委細は善右衞門からお聞き下されたであらうが、折

柄の困窮、先生のお入來を待つこと、誠一日千秋の思ひでござつた、借金の為めに苦められて、この通り痩せ衰れた姿、憐れとも思し召して仕方お取り定めの儀、幾重にも賴み存ずる」

十郎兵衛は禮をもて待ちき、武士の面目を捨つるまでに恭々しく云ひき、金次郎は例の沈着きたる身を儼然構えて

「御當家御困難の次第、具に善右衛門殿から承はる、私斯く推參致せし上は、當家御仕方、御前の御難儀を除くこと、五年の中を出でまじと存ずるが、然し内外の事、一切を擧げて金次郎へお任せ下さるでござらうの」

「いや、お詞は無くとも先生をお迎え申した上は、内外總てお任せ申し上げる所存でござるよ」と十郎兵衛の返答は明白なりき

「きつと左樣か」と金次郎は念を推して「御當家一切の事御任せとあれば、身を粉に碎いても御仕方を付けるでござるが、聊かたりとも御前御存意を御加えあらせるやうでは、私お引き受け申す甲斐もない、由て唯今よりお暇致す所存でござるぢや」

「その御懸念御無用に為させられ、拙者不才、一家を修める用意もなく、難儀困窮御覧ぜらるゝ仕宜となつて、遂に先生を煩はすに立ち至つたのぢや、内外の事先生にお任せ申す、申さば我等敗軍の將、最早や兵を語る心もない、興すとも廢つるとも、唯お手加減一つにござるわ」

「諾し、武士に二言は無い、きつと御誓言なさるゝな」

「天地神明も照覽、二度太刀取らぬ法もござるに………」と十郎兵衛は堅く誓言、膝の上に兩手を突いて「唯丹精を願ひ存ずる」

「御當家御知行は千三百石と傳へ聞いたが、それに相違ござらぬな、而てお借財は」

「いかにも左樣ぢや、而て借財の處は、唯今千百兩に餘つてござる」

「千石餘の御知行に、千兩餘の御借財、さすれば御知行の名ばかりあつて、その實は無いも同樣でござるぢやの」

「誠にお耻かしい次第でござるよ」

「お家柄と申し御身分が御身分、借財御返却の事もなく、今日まで押し通し

てお在でなされたが、これが普通商人、又は百姓で御覧なされ、今頃は早や家財屋敷、何れも人手に渡つてござるに……………自體武士の道、君に忠義を竭す外、他事あるべき筈はござらぬ、さすれば儉約を守り用度を節して、長く子孫繁昌の基を開き、それに由つて君恩の萬分一に御報ひあらせらるゝが、これ平生の則と申すものぢや、然るを御前、一身の榮華の爲めに、お手許不如意とならせながら、仍その原を究むることを爲されず、他の手から財を借りて、その不足を補はせられる、それがお家の禍根となつて元利倍増、一家破滅の基を作る、假にも君恩の深きを思ふ者が、爲べきことでござらうか、餘りと申せば無遠慮が過ぎてござりまする喃」

「何とも辯解の詞がない、唯向後の身を謹んでお詫申す外はござらぬ」

「さらば今日までの不忠義に、心付かせてござりまするな」

「勿論の事、日ごと後悔の涙に咽んでござるわ」と十郎兵衛は目を屢叩きぬ

「御前早やお身の過失を知らせられてある、さればその過失を補はせらるゝが御肝要ぢや」

「過失を補ふにも、その仕方でござらうな」

「いかにもある、唯その身をお責めなさるゝのぢや」

「身を責むるとは」

「儉約をお守りなさるゝぢや」と金次郎は大聲一番「第一は三度の食事、一汁一菜に限らせらるゝぢや、第二は日常の衣服、必ず綿服に限らせられ、第三は、無用の事一切をお捨てなさるぢや、この三ヶ條堅くお守りなさるかな」

「勿論の事ぢや」と十郎兵衛も詞に力を入れて、

「斯うして當家再興の道立たば、拙者望外の幸福、謹んで仰せに從ふでござらうぞ、死すとも違背は仕らぬ」

「そのお詞に命がある」と金次郎は面を和げて「確乎と契約、五年の間待たせられ、お家の棟に掛る雲を、美事に拂つてお目に掛ける」

十郎兵衛は有難き旨返答しぬ、金次郎は次に一家の用人、侍、奥女中を大廣間に呼び出しぬ、木綿の衣服に包まれたる年若き百姓は、宛ら神の使の如く尊く見えき

（二）

用人、奥女中、侍、中働、二十人近き家臣は皆な奥書院に集り、それより以下、若黨、仲間、小厠、婢女の末々は、椽側より庭へ掛けて、おづ〳〵と身を進めぬ、人間の權勢は身分地位にもあらざりき、金銀財寶にもあらざりき、唯一つ心の誠の輝きにありき、誠意誠實を旨とせる同情救濟の心にありき、多くの侍女中、誰一人としてこのむくつけき田舍の百姓金次郎を仰ぎ視るものはあらざりき

「御當家お召し抱えの御家人、これで殘る方は無いの」

烱々として明く、然もその中に云ひ難き優和みを持てる金次郎の眼は、座敷の内外をずらりと見廻しぬ、用人の狹山治平は神の御前に出でたる如き聲をして

「これで悉皆、他に殘るものはござりませぬ」

「さうか」と金次郎は頷いて「私は御領内栢山の百姓二宮金次郎ぢや、お見知り置かせられ」

一同は唯平伏しぬ、金次郎は詞を續くる

「不束な者御招待とあつて、お家敷の仕方を御委任あらせられた、百姓の身を以てお武家の御家政を干るは、誠迷惑の至りなれど、再應三應の御懇命、默し難くお引き受け申したが、これ誠に容易ならぬ一大事、中々成功は覺束なくと存ずる。然し、又退いて考うれば高が借金の始末、致し樣一つに由ては何の苦もなく仕遂げらるゝ、成る、成らぬ、唯お前達の心にある、私や御主人が、いかほど精根を盡しても、お前達の心が一致せいでは、この仕方容易に付かぬ、なれど一家の者心を協せ、主家御大事に殉ずる覺悟、命を懸けて事に當らば、五年の間に温き日が必然照る、どうぢや一致して主家の爲めに盡すか」

「仰せまでもござりませぬ、我々心を一にしてお家の爲に盡しまする」

治平は衆の口に代りて答へぬ、人々はたゞ平伏したるばかりなりき

「お前達も存じの筈ぢやが、御當家お借財千餘兩にも上つてある、このまゝ

三五年を打ち捨て置かば、御當家御先祖の御名譽、御當家千三百石の御知行、悉く根本から覆へる、今の御當家はまこと卵を累ねた如き樣ぢや、これに適當な仕法をつけて、無事永續の道を立てやうと存ずる、お前達に思ひ付きはないか」

「私共みな下々のお召使ひ、中々以て左樣の仕方存じ居る筈はござりませぬ、此上はたゞあなた仰せに從つて犬馬の勞を致すばかりでござります」と治平は又人々に代りて云ふ

「さらば私に任すといふな」

「唯あなた樣お力に頼みまする」

「諾し、さらば云ふが、御當家御主人も家事のこと一切を擧げて、悉く私へ御委任、然る上は一言半句も口出しは致さぬと誓はせられた、私は誠の一字を正面に被て、御當家御囘復の道を圖る、お前達も皆な私の指圖に從ふであらうのう」

「仰せまでもござりませぬ、あなたお詞とあれば火の底、水の中をも潛りまする」

「萬一私の云ふことに不承知あらば、此場に於て暇を願はつしやい、良きに取り計ひ進ぜるでござらうに……」

彼は又その圓き眼に一座を見廻しぬ、治平は恐る〳〵顔を擡げて

「何を仰せられます、私共みな譜代の御家人でござります、それがお家危急を前に見て、お暇を願ふものは一人もござりませぬ、御當家御仕方の爲めに來らせられたあなた樣、御主人お指圖同樣と心得て、何事にも從ふでござりまする」

「一同みなそれに同意か」

「異存ござりませぬ、一同皆な納得でござりまする」

鈍き聲、清しき聲、高き聲、低き聲、口は異れど音は悉な同一なりき

（三）

金次郎は直に服部家の仕方改革に着手しぬ、金次郎の仕方は唯一なりき、

即ち「入るを量つて出るを制す」この外はあらざりき

由てまづ年々の收入を豫算して、その中より分度を引き去り、一藩の家老として見苦しからざる程度に於て、中分の活計方を定め、無用の雜費は除り省きて、主人、家內、僕婢全體の入用を立て、それに則りて嚴重に家法を制定しき、假令主人たりともこの家法に背くものは重罪たるべしとなり、先祖への最大不孝たるべしとなりき

次には當家に貸金ある町人を屋敷に集めて、返濟方の猶豫を乞ひぬ、借金は皆な眉に火の點く如く迫れり、利息の幾分にてもさし入れずば、到底猶豫の色なき債主もありき、されど金次郎が諄々と利害を說くを聞きて、皆一齊に耳を傾けき、服部家の今の有樣は、宛ら枝ばかりとなりし柿の樹の如し、葉の落ちて枝のみ繁る樹より、少の物にても利を得んと思はゞ、根本より剪り捨てゝ幹を賣る外なけれど、幹を賣る利は些細のみ、來ん秋を待ちてその實を採らば、一顆幾文莫大の收益を得ん、服部家は今實の無き柿樹なり、この樹より利を取らんとせば、幹を倒す外なかるべきも、秋分知行所の年貢上納を待たば、それに幾倍せる利を見たる上、肝心の柿樹を枯らすことなく、更に年々の收益を見行く利分あり、我等仕方を一任されたる上は、一文の損失も掛けまじ、利息その他に根引きも賴むまじ、少きは二三年、多きは三四年の猶豫の中に、つぎ〳〵償却の道を立て行かん、御當家へ金子を用達せるは、御當家繁昌を謀る爲めなるべく、御當家御名に疵を付けん心にてはあるまじ、その返濟の方法は此の如くなり、と云ひつゝ兼て計算し置きたる書類を出して示す、此處へは幾兩、彼處へは幾十兩、今秋より來秋來々秋に亙りて元利幾許を返濟し行くべき豫算の統計明白なり

利に敏き町人等、誰とてこの提議に異存ある筈なく、一同みな納得の旨を返答して引き退りき、金次郎改革の第一着手、まづこれにて成功せるなり

「お鍋、お炊、お鶴、お龜、一同これへ出さつしやれ」

臺所に働き居れる炊婢は悉く金次郎の前に集る、金次郎は最も嚴格なる態をもて

「まづ此でお家仕方の道がついた、その御祝儀として以來鍋炭を買ふて進ぜ

る、精々貯めて一升になつた時、私の手へ出さつしやい、それが御改革の御用に立つのぢや」

「不思議なことがあるものでござります、然しお鍋炭などにお金を戴かないでも、お上御用に立つとあれば、精々貯め置きさし上げるでござりまする」

「いや無償貰ふのでは埒開かぬ、相當の價を進ぜる」

「お鍋炭がお錢になるとは、この様な結構なことござりませぬ、各自が氣を注け、能きるだけ貯めるでござります」

「よく頼んで置く、それから日々の薪ぢやが、御飯一斗炊くに何れほど要るかな」

「確乎に量つて見た事はござりませぬが、ざつと四貫目は要るでござりませう」

「さらば假に四貫目と定める、一斗の飯に四貫目の薪――それに餘分があれば買ふて遣はす」

「薪の殘部をお買ひ上げになるでござりまするか」と炊婢はいよ〳〵不審なりき」

「いかにも買ふて遣る、殘餘の分は取り纏めて私の手元へ出さつしやい、それから紙、油、元結などの日用品、今までは自身買ひに行くこともならず、屋敷へ出入の町人共へ申し付けて居たさうぢやが、左様なことは一切相成らぬ、以來は此方において買ひ調へ、元價を以て下げて進ぜる」

金次郎の改革は此の如く小さき介介の下に手を着けられき、家内の者は皆な意外に感じたれど、可否を云ふものは一人も無かりき

(四)

鍋炭買入の方法は忽ちに好結果を現はし來りき、鍋炭を金に替えらるゝが嬉しく、炊婢どもは皆な爭ふて鍋の下をこそげぬ、炭の無き鍋は飯を炊くに良く、更に薪を倹約するに宜かりき、薪の剩餘買取の新法は、それよりも仍多くの成功を見き、炊婢は皆な倹かに、少分の利を求むるに汲々たるものあれば、成るべく薪を節約せんとして、邸内の此處彼處を見廻り、苟くも竈の

下に燒くべきものは、皆な拾ひ採りて燃料に使用しき、その結果は日に見えぬ儉約法となり、屋敷の古木自然に取り去られて、隅々清潔に爲り行きしぞ面白き。

金次郎は何事にも小を積みて大を爲すべき大主義を實行しき、彼の命ずる處は誰人にも行ひ易くして、然も功力偉大なりき、彼の慈悲善根は家の中に瀰蔓しぬ、彼の眞心は屋敷の何物にも徹し來りぬ、金次郎來りて一二年ならぬに、庭の樹々は色よく繁り、軒の雀は勢ひ好く鳴き、多くの奴僕用人は皆な樂しく日々の勞に從ひき

情無き草木すら此の如し、心無き小禽すら此の如し、一家は自ら活々と世に出でぬ、破れたる壁は元のまゝなれど、その上を淸き朝日は照らしき、金次郎を得たる服部家は宛ら水を得たる轍鮒の如き動き始めき

「長々御厄介になりましたが、私はお暇が願ひたうござります」と金次郎の前に手を突くは炊婢のお鶴なり、彼女は父の病氣とあるに捨て置き難く、涙ながら暇を願ひ出たるなり

「父の病氣とあれば致し方がない、すぐ暇を遣る、歸つて孝行を盡すがよいぞ、じてそなたに給金の殘餘は無いか」

「有難うござります、お給金は皆な戴いてござります」

「それでは些少ぢやが……」と一分金を紙にひねりて、これで菓子なりとも調へよ、そなた孝心に愛でゝお上から下さるのぢや」

「有難うござりまする、父に見せて歡ばせるでござりまする」

幾度か禮を述べて立たんとするを、金次郎は押し止めて

「そなたに預つた物がある、待つしやれ〱」

云ひながら手文庫より紙袋に容れたる金子を出して、そのまゝお鶴の前に置きぬ、お鶴は不審晴れざりき

「私、お金をお預け申した覺えがござりませぬ、何かのお間違ひではござりませぬか」

「いや、間違ひではない、正しうそなたから預つたのぢや、覺えないか」

「少しも覺えござりませぬ」

「そなた心付かぬであつたか知らぬが、先年より當方で買ひ調へ下げ渡して居た紙、油、元結、その外の日用品、お前方が從來使ふて居たものより、一等づゝ下つた物を與へて居たのぢや」

「左樣でござりましたか、一向心付かずに居たのでござります」

「この金はそれの間ぢや、一等下つた物でも、用を辨ずるに差支えは無い、然も年分に積ると、その高が斯樣に嵩む、これを見さつしやれ」と紙袋からざつとあける、銅錢一朱銀取り交せて三四貫に餘るべし「少し氣を注けると、此通りに儉約される、歸つてからも上等の品物使ふのは止めて、餘つた金をこの通りに殘して置くぢや、」

「有難うござります、唯今の御敎訓、一生忘れは致しませぬ」

「これで親人へ土產の一個も買ふて行け、すればお前の孝心で、病氣を退けることが能きる」

お鶴は感淚に咽びつゝ引き退る、金次郎の奴僕を使用する法、此の如く親切なりき

（五）

奴僕の暇を取りて去るものありとも、金次郎はその代りを雇ひ入れざりき、去りたる者の給銀を頭分して殘れる者に與へ、有りたけの人數を巧みに使ひて、脫漏なく日用の事を辨じき、時に人の不足する事あれば、おのれ勝手元に降り立ちて、婢女の手に代ることもありき、若黨仲間の足に代りて、十郎兵衛の供に立ちしこともありき、暇あれば十郎兵衛の居間を訪れて、大學論語を講じたる事もありき、百姓の道に托して武士道を說きたる事もありき

三年目の夏のある日、弟三郎左衛門少しの土產を持ちて尋ね來る

「お父樣お母樣のお墓に草が生えて居はせぬか」

これ金次郎が第一の問ひなりき

「善右衛門樣、金瑞和尙、萬兵衛殿、太兵衛殿、何れもみなお渝りないか」

「皆樣お渝りござりませぬ」

「田の草よう取るか、稻に蟲の付いた樣子もないか」

「雨風みな順、これならば豐作と村中の歡び、お目に掛けたいほどでござります」

「酒匂川の土手も近來は丈夫、村の衆もみな安泰、そこで富次郎は何んとある」

「相變らず病身、寐てばかり居りまする、道齋樣日々お見舞ひ、御匙加減に御如才はないやうでござります」

金次郎は最後に「おきのも無事か」

「姉樣も御達者、五年の月日を指折つて算へさせでござります、それに兄上お歸りの時は、服部樣から何百兩のお禮もあつて、立派なお身裝、田地の五六町も一時にお買ひ求め遊ばすでござりませうと、それぱかりをお樂みでござります」

「そなた何の用があつて來たな」

「久し振にお顏も見たく、それに一昨年此方樣へお上りなされてから、一度のお歸りもござりませぬ、栢山までは二里足らずの處、ちよとお歸りなされては何うあらうかと……」

三郎左衞門の詞終らぬに、金次郎は忽ち氣色をかえて

「お身は何處へ年を取る、二十を過ぎて心はまだ子供、其樣な不心得で金次郎の弟と云はれるか、五年の間は身を粉に碎いて、御當家仕方を付ける心と、栢山出發の時くれ〴〵も云ふたでないか」

「それは存じて居ります、なれど唯一日か半日の事——」

「それ、夫が愚鈍ぢや、一日半日も有用のことに費へば、十年二十年の計が定められる、五年の間に當家仕方を付けやうと覺悟した時から、一寸の間も他のことを考えたことは無い、栢山の家にはそなたが殘してあるではないか、おきのに留守を云ひ付けて置いたでないか」と大聲に叱り付ける

三郎左衞門は二の句を續ぐ勇氣もなく、朗かな顏を紅うするのみ

「一事を成し遂げやうとするには、その事に專一とならねばならぬ、當家仕方の大任を受けながら、女々しう家へ歸るやうなことで、乃公の望みを遂げることが爲きると思ふか、全體そなたは心の浮付く病がある、乃公の留守を

引き受けたら、何故專念に留守をせぬ、さして用も無いに乃公を尋ねて來るやうで、一人前の留守居がなると思ふか、歸れ〳〵」

「歸れなら歸りも致します、然し私は今日兄樣を尋ねやう爲めに、昨日二日分の仕事をしたでござります」

「何んぢや二日の用を一日に爲たといふか」

「今日は遊んで居ても大事ないのでござります」

「呑鈍たことを云ふな、一升の桝に二升の米を容れることは能きぬ、一升は扨て置き五合も三合も、一合も一勺も餘計に容れることは能きぬ、一日の用は一日一ぱいに仕揚げるのが定法、二日分を一日にするなど以ての外の事、それは用を爲たので無く遊び事をしたのであらう」

云ふこと皆な阿兄の心を惡うする基となるに、三郎左衞門はいかにして機嫌を取り止むべきかに胸を惱ましつ、農事の忙しき間を、切て一目逢ひたさが前ちて、手土產の草餅に溫き心を包み、思ひに思ひて來て見れば、此上も無き不機嫌、此上もなき腹立、笑顏一つも見せず、直ぐ歸れ、と嚙み付く如

き詞なり、我身に不調法もあらん、我身に落度もあらん、されど折角尋ね來つるものを、善く來た、とも云はれず、追ひ出すやうに宣ふお心の氣強さを、三郎右衞門情無くは思ひたれど恨む氣色も無く

「それならば歸ります、隨分身を厭ふて、御機嫌好くお在でなされませ」

（六）

金次郎の目星は違はざりき、彼の手を着けたる服部家の仕方回復は物の美事に功を奏しき、千百兩餘の負債は五年の間に悉く償却して、彼の文庫には三百兩の餘剩を生じき、彼の歡び推して知るべし、服部家上下の喜悅譬へんに物も無かりき

服部家の白塀は皆な新しく塗りかえられぬ、服部家の石崖は皆な頽れたるを修覆されぬ、庭の松には千歲の翠活々と蒼く、裏の藪には雀の鳴く音千代々々と清しく聞こえぬ、內部の整理行き屆くと共に、外部も又見違えるまで美はしくなりぬ、死水の底に沈みたる服部家は圖ずも活波を得き、大旱に打

たれたる稻の穗はこゝに圖りなくも慈雨に濕ひき

金次郎は十郎兵衞夫婦を奥の一間に招きぬ、十郎兵衞は木綿の着物に、黑木綿の羽織を着、妻は木綿の詰袖に、木綿の帶を締め居たり

「御主人、奥方、ずつと此方へ進ませられ、今日は金次郎改めてお禮を申す」

金次郎の側には金唐革の手文庫ありき、金次郎の目は滿足の光りをもて充たされぬ

「先生、何事でござるかな」

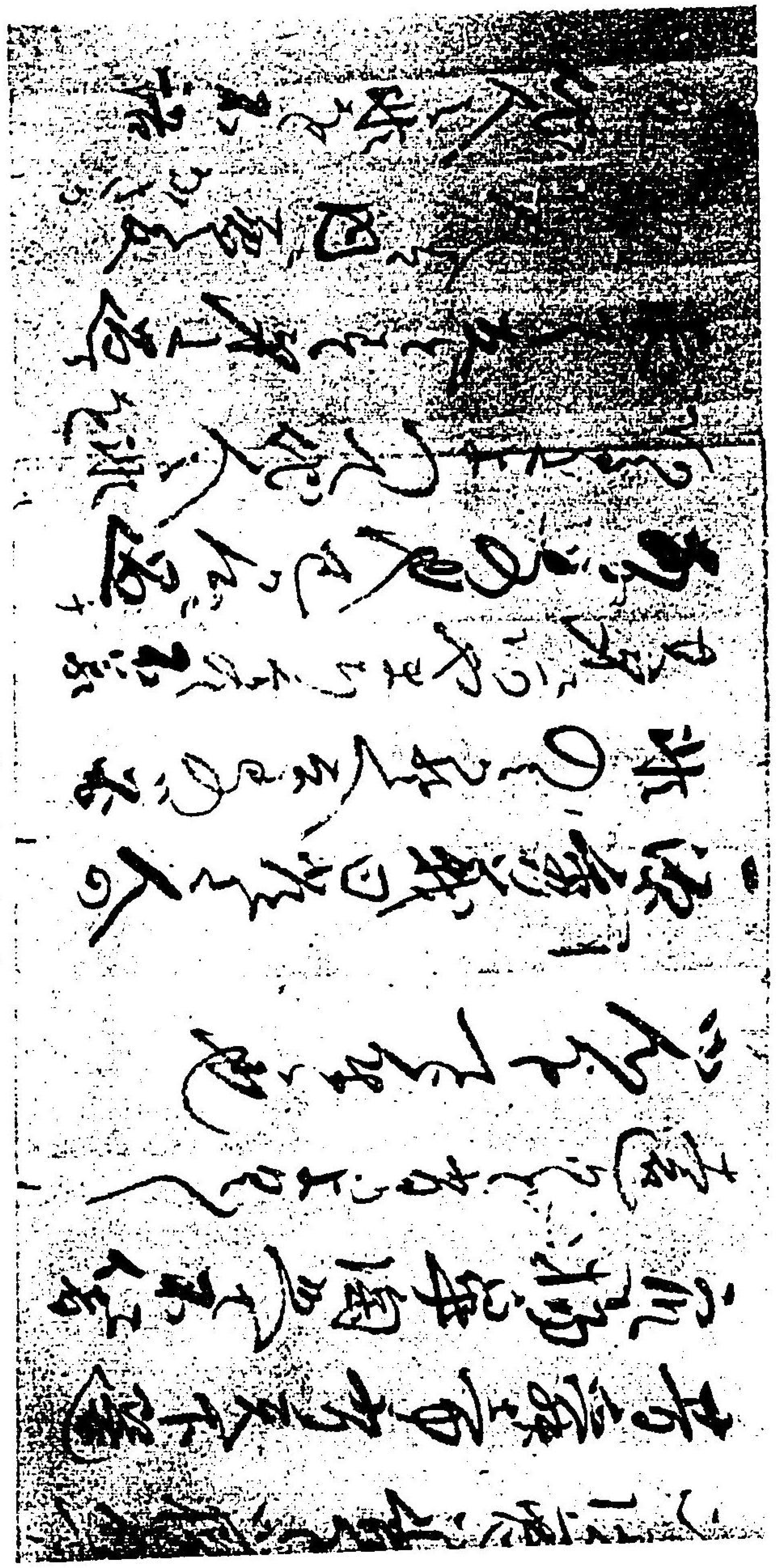
十郎兵衞は仍一家の浮み上りたるを知らざりき、何日に無く金次郎の笑ひ顏に云ふを、妻と共に不審なる樣見えき

「私が始めて當家へ參つたは、六年前の今日でござつた」

「もう全五年になりますかな」と十郎兵衞は驚きたる如く「月日の經つは早いものでござります」

金次郎は手文庫の蓋を開けて、その中より三包の小判を取り出し

「こゝに三百兩の金がある」



二宮翁書簡の一節

第十章

十郎兵衛は仍その所以を知りかねて、妻と顔を見合せき、金次郎は次に一冊の小き帳面を取り出でゝ、十郎兵衛の前に置きゝ

「この帳面を御覧下さると、五年間の出入が全然分ります、五年間の出入差し引き、千兩餘の借金一文の殘りも無く返して、後に三百兩殘つてござりまするぞ」

「えゝ」と十郎兵衛は夢かと驚きて「借錢悉く返濟とござりまするか」

「いかにも左樣、篤と帳面を御覧下され」

「あア、これ」と十郎兵衛は嬉し涙にかき曇る眼を妻に向けて「有難いことではないか、辱ないことでは無いか、當家の借錢悉く返濟、その上に三百兩の金子が殘つたといふ、これ皆な先生のお蔭ぢや、仇おろかに思ふては相成らぬぞ」

「私はたゞ夢かと心得まする」

「夢にも斯ほど吉い夢は無い、まづ差し當るお禮申さねば澄むまいぞ」

十郎兵衛夫婦は其處に兩手突きて、誠意の盡力謝するに詞なきことを述べ

ぬ

「いやお禮には及ばぬ、これは私の力ぢやない、御主人、奥様、私に内外のことをお任せなされて、一言のお口出しもなさらなんだ、そのお心の給物ぢや」

「誠に先生は當家を守護の氏神様で在らせられる、この大恩いつの世に報い奉つるべき、私はたゞ感涙の外ないのでござる」

「私もお家の仕方に手を付けてから、隨分苦勞も致したが、私よりは御主人奥様、よく儉約をお守りなされた、よく御不自由をお忍びなされた、そのお心、いつまでも續く間は、當家の基礎大磐石と存ずる、就いては金子のお入用もあるまいが此内の百兩、これは別物として御主人お手許にお止め置き、非常の時殿様へ御奉公の御用に立てさせらるぢや」

「いや」と十郎兵衛は遮つて「そのお金子、拙者頂戴致す筈はござらぬ、これは平に………」

「まづ待たせられ、何事にもお口出は無い筈、萬事私の指圖にお任せなさる

筈でござらぬか」

十郎兵衛は直に口を噤む、金次郎は泰然たり

(七)

「夫から殘る二百兩の内百兩、これは奥方お手許へさし上げる」

「え、私にまで………」

「御婦人の御身分で在らせながら、御主人同様、艱苦儉約、お家再復の爲めに御心を盡させられた、私はそれを思ふことに、幾度涙を流したかも知れぬ、百兩の金子は奥方御艱苦の紀念ぢや、長く別途に備へて大切の御用にお立てなされ、御辭退は決して爲りませぬ」

最後の一語、宛ら秋霜烈日の如くなりき

「有難く頂戴致しまする」

「あとにまだ百兩ある、これは何なりとも御主人御用途にお充てなされ」

金次郎は云ひ終りて、三包の小判を十郎兵衛夫婦の前へ押し遣りぬ、十郎

兵衛は殘る方も無き金次郎の所置に感じて、暫時は詞も無く垂頭きてありしが、此時きと頭を擡げて

「何から禮を申して好いか、餘りの事に詞さへも出ぬ、まづ恕させられ」と十郎兵衛はつと進みて、金次郎の膝に置きし手を取り、我額に戴きつゝ「五年前の今日あたりは、此家今にも泥田の中へ頽れ落ちやうかとも見えたを、貴殿御丹精の賜物に由つて、唯今は大磐石と相成つた、この大恩報い奉る術もない、唯この三百兩の金子、これは拙者の物でも無い、將た當家の物でもない、先生丹精の餘りに出たのであるに由つて、勿論先生のお手へお收めを願ふのが當然と心得る、なれど我等夫婦へ百兩つゝを下され、後々の用意に致すやうとの御教訓、それを戻り奉るは罪深うも存ずるゆゑ、二百兩の金子は夫婦の手へ有難く頂戴するが、切てはこの百兩、先生のお手へお收め下さることは能きぬでござらうか、五年の間當家に御逗留、一度も御歸宅なさせられぬ、その間の辛勞、お察し申すに餘りがある、これを家業の御助けともなさせられなば、我々夫婦の滿足、まこと此上も無い儀でござる」

「さらば此金子、私に下さらうとぢやな」

「眞のお禮の志るし、報恩の萬分の一でござる」

「それは千萬辱ない、御辭退も致す筈ぢやが、折角の思し召し、辱なくお受けをする」

「お受け下さるか、やれ〳〵辱ない、これ」と十郎兵衛は又妻を振り返つて「先生百兩の金子をお收め下さるぢや」

「さて」と金次郎は改つて「まづこれで一たんの憂は除く、唯今の處ではお家大磐石と存ずるが、千年の松も枯れることがある、後々の定目がなくてはならぬ、實は五年の間の出入諸雜費、御家風を參酌して、私の調べ置いた永年の分量がある、お守り下さらうか」

「何事にてもお詞に背く事は致しませぬ」

「さらば申す、以來は千石を以て分限とお定めなされ、その上に超ゆるやうの御支出をなさらぬ事、よくござるかな」

「謹んで奉じまする」

「すると後に三百石の餘剩がある、それは別途に積み立て置いて、國家萬一の御用に充てらるゝぢや」

「謹んで奉じまする」

「さすれば千石で家老たる地位を支へ、三百石で忠義奉公の礎を御定めぢや、かゝれば御當家有らん限り、きと御繁昌であらせられる」

「何から何まで殘る方なきお仕置き、有難くお受け申し子々孫々に傳へて、家の掟と致すでござる」

「それを承はつて、私も滿足仕つた、さらばこれにてお暇致す、家のことも氣がゝり、一刻も取り急ぐ、何れ時々お見舞ひは申すが、今日は一時お暇乞ひを致すでござる」

金次郎は百兩の小判を手に持ちたるまゝ起ち上りぬ、十郎兵衞夫婦は殘り惜しく玄關まで見送らんとするを

「其儘々々、まだ召使ひ衆に暇乞ひを致さねば成りませぬ」

（八）

今日は金次郎當家の暇を得て、栢山村へ歸るとの評判、早や屋敷中に行き渡りて、名殘惜しさに泪流すものさへありき、金次郎は十郎兵衞夫婦の前を退きて、用人の治平を始め奴婢一同を廣敷へ呼び寄せぬ、治平を始め多くの男女は誰とて金次郎を仰ぎ視る者も無く、中には涕泪を啜るもありき、

「さて皆の衆、緣あつて御當家へお招きに預つてから、全五年の間同じ鍋の物食ひ合ふた間、懷しうもあり、又床しうもあるが、お蔭でお家の仕方も付いて、後に殘る心配も無く、私も今日はお暇を願ふて栢山村へ歸らうと思ふのぢや、全五年といへば長いやうぢやが、千兩からの借錢を返濟するにはちと不足であつた、その不足の中に望み通り仕方を立てたも、お前達が私の云ふことを聞いて、正直に働いて下されたからぢや、改めて禮を云ひます」

「えゝ、何をお云ひなされます、あなたからそのやうの御口上を承はつては、私どもへ罰が當ります」と治平は一同を見返つて「これ御覽じませ、こゝに

居る者誰一人として、あなたの徳に懐ぬものはござりませぬ」

「私も名殘惜しうは思ふが、五年の間捨て置いた家の事も氣に繋る、小田原と栢山とは眞の目と鼻、又時々逢ひにも來る、御當家も今までとは違つて、お手許も緩かにお爲りぢやゆゑ、皆の衆へもそれ〳〵下され物はあらうが、これは私の志、こゝに小判が百兩ある、治平どの、これを平等に分けては下さらぬか」

「えゝ」と治平は喫驚して「このお金を私共へ下さるのでござりまするか」

「今御前から戴いたのぢや、五年の間に千兩の借銀を返した上、三百兩の餘剰が生きた、その中の百兩を私へ餞別に下されたのぢや」

「それならあなた樣のお金でござります」

「私の金ぢやに由つて進ぜる、私が御當家の仕方を引き受けたのは、一身の爲めを思ふからではござらぬ」

「はい〳〵」と治平を始め一同は頭を下げる

「少しでも自分の爲を思ふ心があるなら、御當家のお招きには應ぜぬ、それはお前達もよく推量して呉れるであらうの」

「よく御推量申して居ります、なれど此百兩はあなた樣五年の間の御苦勞にお報いなされうとて、お上から下されたお金でござります、私共はお給金を頂戴して居る、その上又斯樣な物を戴いては、それこそ天罰が恐しうござります、此は其方へお受けなされて下さりませ」

治平の辭退は滿座の意志を遺憾なく代表するにてありき、彼の眼には涙滿ち、彼の顏には感謝の光り溢れき、啻に彼のみにはあらず、滿座の婢僕一人として金次郎の厚意に感じ且つ泣かざるはあらざりき

「いや、私は要らぬ、私は一文の金も要らぬ、私が進ぜると思へば遠慮もあらうが、要りは主人から下さるのぢや、心置きなく取て置かつしやれ」

「それほどに仰せあるを、御辭退申し上げるは却て失禮ぢや」と治平は恭々しく金包を戴いて「皆の衆頂戴して置かうかの」

「私どもは何も申しませぬ」と異口同音に云ひながら、金次郎を伏し拜みて

「これでござります〳〵」

人々が涙ながら感謝するを後に見て、金次郎は飄然と立ち去りき、五年前栢山よりこの屋敷へ來りたる時と同じく、木綿縞の着物に短き小紋の羽織を被たるが、この羽織には燦きまでに光りありき、ぶッてりと太りて身丈高き身體には、希望の輝き滿ちて見えき

（九）

金次郎は家に歸りぬ

庭の樹々は五年前に變ることも無く、青々と繁り、その間に點綴して咲く花の香は、主が五年の間に成し遂げたる事業の潔きに薰るが如く芬郁たりき

おきの、三郎左衛門、富次郎を始めとして、萬兵衛、太兵衛、善右衛門、道齋、金瑞和尚、お澤までが門前に出迎えぬ、この中に優れて翁の目を牽きたるは、隣村竹松村の名主幸内といふもの交り居たる事なりき

幸内は實に彼の劔持廣吉の妹婿なりき、金次郎が萬兵衛の許より歸りて、一本立の身となりし時より、深くその爲人を慕ひ、時々金次郎の家を訪れては、彼が特獨の天理人道論を聞くを樂みしが、今日圖りなくも此處に來合せて、彼の歸りを迎えたるにてぞありける

金次郎は此等の人々に一應の挨拶して、ずつと奥の座敷に入りぬ、五年の間の勞苦を犒ふもの、無事を祝する者、留守中の事共を何くれと報告する者、金次郎の周圍は、夫妻の情、同胞の情、故舊朋友の至情に由りて取り卷かれぬ、おきのは取敢ず杯盤を持ち來る、煎豆、雜魚の煮浸、辛き味噌汁、下物は粗末なれど酒の色は濃かなりき、心を籠めたる酒の色は濃かなりき

一通りの盃事終りて、人々は皆な明日を約して去りぬ、後に三郎左衛門は風呂の下を焼かんとて出で行き、富次郎は例の弱き身體を椽側の日南に横へて座敷には金次郎とおきのとのみが殘りぬ、おきのは美しき顔に笑を湛へて

「五年の間の御不自由、お察し申すも恐れ多うござります、然しお身體にお障りが無うてこのやうな嬉しいことはござりませぬ」

「內も達者で何より結構ぢや」

「あなたもう一つ御酒召し喫つては何うでござります」

おきのは心に何物をか待つ様なりき、五年の間身を砕きて御家老のお家再興を圖り、然も首尾好く望みを遂げて歸りたるなれば、その懷中には燦として目を驚かすべき、土産物あるならんと推測しぬ、されど良人は絕えて土産物の噂だも爲さゞりき

「酒はこれで澤山ぢや」

「それではお風呂へお召しなされては何うでござります、今日はあなたがお歸り遊ばすと存じて、久しぶりに美しいお湯を沸したでござります」

「さうか、過分に思ふ」

「お前へお入りなされまするか、それとも……………」と待ち難ねるやうに氣を揉んで、五年の間の積るお話でもなされまするか」

「別に話すほどの事もないが、服部殿殊の外のお歡びであつた」

「爾うでござりませう」とおきのは淸しい目を光らせながら「あなたの御丹精で、お借財は皆なお返しなされたさうでござります」

「千百兩ほどの借財を悉な返して、あとに三百兩のお金が殘つた」

「え、三百兩の……………」とおきのは笑を禁めかねて「それが皆なあなた御丹精の凝塊でござりまするな」

「私も骨折甲斐があつて歡ぶ、それに服部殿御夫婦、お召使ひの衆までが、私の云ふことをよく聞かれた」

「爾う無うては協ひませぬ」とおきのは又膝を進めて「あなたお風呂を召してはどうでござりまする」

「今は欲しうない、もちつと後にする」

おきのは煩悶しさに堪へざりき、此方より問ふべき事にてはあるまじきも、彼方とて何日までも知らせずに置き給ふお心はあるまじ、同じ物ならばその光りある土産物見せて、全五年といふ長の月日、お不在を守りてありし、我のこの心を歡ばせて下さるが當然なるべし

「三郎さまも富さまも、あなたのお歸りをお待ち難ねでござりました」と遠廻しに謎かけて「澤山お土産をお進げなさらねばなりませぬ」

「はゝ」と金次郎は笑ひながら「彼等は私の居ぬのを歡んで居やせぬかな」

「ほゝゝ」そんな事はござりませぬ、あなたの代りと仰せなされて、甚うお働きでござりました」と云ふ中に又進み出づ

「然し、私が居ると叱言云はれるでの、結句留守の方が好いであらうぞ」

「あなた」とおきのは遂に堪へかねて「何もお荷物はござりませぬか、お召替えの垢づいたものなどは、早う日に乾さねばなりませぬ」

「いや心配するな、荷物などは一つもない」

「一つも無いとて…………あなた五年の間、服部様で何をお勤めでござりました」

おきのは惘れ顔に問ひぬ、彼女の目には涙さへも見えたりき

「それはお前などの知らぬことぢや」

「でも少しは御褒美がありさうなものではござりませぬか、五年の間のお勤め、少しはお金も殘つたでござりませぬか」

「魯鈍たことを云へ、私は金を儲けに服部殿お屋敷へ行つたのではないぞ」

その聲宛ら百雷の落つる如くなりき

（十）

「それは分つて居ります、けれど五年の間………」とおきのは寧ろ悲げなりき

「五年の間の仕事は今もいふ服部家の仕方ぢや、千兩の借財を償却して、三百兩の餘剩を得た」

「その三百兩を何うなされたのでござります」

「百兩を主人十郎兵衛殿お手許金にさし上げた」と金次郎は沈着いて「人間には金の用意が大切ぢやからの、千三百石の主人でも、一兩の金に困る事がある」

「すると百兩は服部様お手許へお殘しなされて、後の二百兩を何うなされたのでござります」とおきのは又問ひ掛けぬ

「その中の百兩を奥方のお手許金にさし上げた、女にも金の入用が無いとは云はれぬ」

「それでもまだ百兩の殘金がある筈でござります」とおきのは涙含みて云ふ

「殘りの百兩――それを私の骨折に下さらうと云ふ思し召しであつたが、私は金が欲しさにお屋敷の仕方を引き受けたのではない、要りが服部樣はお家の御家老、その家の廢滅するのは御領主の御恥辱と相成る假にも御領内に住居しながら御領主御耻辱と相成ることを、餘所に見る法は無いと存じ、百姓の身を提げて、お武家樣の御家政に手を入れたのぢや」

其事は最初から善く承はつてござります、而うして殘餘の百兩を何うなされました」

「悉く御家來に分けて遣つたよ」

「え〻、服部樣の………」

「いかにも爾うぢや、御主人御夫婦、いかに仕法にお心を籠められても、家人家來に忠義の心なければ、この樣に都合よく仕方は付かぬ、すれば家人にも手柄あつて御褒美に預からぬほど、口惜しいものは無いと存じ、殘る百兩を悉く遣て參つた、私はこれで氣が爽々する」

「あなたはまア………」とお木野は惘れ顏に目を睜つて「何といふことを爲さるのでござります、私はどう考えてもあなたのお心が腑に落ちぬのでござります」

「お前、私の心が分らんか」

「あなたは夫でお宜しいか存じませんが、五年の間お留守居をした私の身はどうなるのでござります、私はあなたがお歸り遊ばす時に、きつと澤山のお土産がある事と存じて、どれほど樂んでお待ち申したかも知れませぬ」

「それぢやお前は私を待つて居たのぢやない、土産物を待つて居たのぢや」

「五年の間お留守居をした甲斐が無いとは、何んといふ情無いことでござりませう」

「そんな事を云ふものではない、人の事に骨を折て禮を受けやうと思ふはそも〳〵末ぢや、例も云ふことぢやが、貧乏は決して不幸ぢやない、これから夫婦で心を合せて、一生懸命に家業を勵めば、それの惠みは必ず來る」

おきのは淡化粧せし顏を、半ば襟に埋めてありき、金次郎が慰め顏に云ふ

詞を、唯上の空に聞き居たりき、彼女は今日こそ光りある多くの土産物を得るならんと心待ちし、心樂みせし的外れて、思ひはあらぬ方に走せ行くなりき、口惜しきとも付かず、無念とも付かず、阿呆氣たりと云はんか、情無しと云はんか、何とは無く無遮苦遮と腹が立つなりき、一日千秋の思ひにて待ち焦れしにも似ず、顏を見るさへ腹立たしくなりぬ、聲を聞くさへ無益しき思ひ爲始めぬ、されど金次郎は仍この妻を信用して、宛ら赤子に對するが如く和かき詞をもて對しぬ

「正しい道を踏んで、正しい業に勉めさへすれば、富貴は自然に巡つて來る、高の知れた百兩や二百兩、持つて歸らずとも悔むには當らぬことぢや」

おきのは何の返答もなかりき

「五年の間乃公が病氣をしたと思へば濟む、乃公が百兩の金は持て歸らずとも、百姓の手で武士の家の借金を修め、後々の仕方まで付けて歸つたのぢや、すれば乃公ばかりの譽れではない、百姓一體の譽れぢや、この譽れば百兩や二百兩の金で買へるか、金は稼ぐ人の運命について廻る、けれど正しい譽れ

は何日誰の身にも得られると極つては居らぬ、お前は乃公の云ふことがまだ分らぬのか」

金次郎を門口に迎えし時の笑顏は消えて、その痕へ滂沱たる涙流れぬ、されど金次郎は毫怒りたる態も無かりき

「お前も私の妻ではないか、何日までも何を考えて居る、私がこれほどに云ふこと、分らぬ筈は無いでないか」

おきのはきつと顏を揚げぬ、息は機み、唇は慄ひて、暫くは聲も出でざりしが、やがて

「私、今日限り御離縁が戴きたう存じます」

失望の餘り怒りを作したる彼女は、遂に離縁を迫るに至りき

「お前、私に離縁をくれといふたな」

「到底堪忍することは能きませぬ、今日限り御離縁をお願ひ致します」

「お前、何か思ひ違ひをして居るのではないか、夫婦別れと、私が百兩の金を服部家の御家人に遣て歸つたのとは理が違ふぞ」

「私今日までは我慢して居りましたが、もう〳〵あなたには愛想が盡きたのでござります」

「ほゝう、私に愛想が盡きたといふか」

「はい………」

「それで長の暇を呉れよか」

「あなたのお側に居ては末始終の事が案じられます」

「暇を呉れなら與らぬでもないが、お前後悔することはあるまいな、人間第一の不幸は、幼して雙親に別れるのと、理もなく夫婦別れをする、この二つぢや、私の貧乏な事はお前も承知、私が他人の爲に身を惜まず働いて、自分に薄く他人に厚くする事はお前も承知、弟のあることも、田地の少い事も皆な承知の上嫁入つて來たでは無いか」

「もう何んにも聞きませぬ、私の覺悟はちやんと極つて居るのでござります」

「さうか、それでは私も勸めぬ」

金次郎は普通の詞なりき、これほどの大事に際みながら、普通と變る處も

なき調子なりき

「お暇下さるのでござりまするか」

「欲しければ何日でも遣る、ぢやお前も五年の間留守居をして、私の歸るのを待つて居て呉れたのぢや、望み通り離縁をして遣れば好いやうなものゝ、それではお前の身に着く物が一つもない、是非歸りたいと云へば止めはせぬが、どうぢや暫く此處に居て、衣服の一枚も作り、小使錢の二三貫も貯めて歸つては………」

おきのは是に答へなく、つと立ちて納戸へ入りき、されど金次郎のこの詞を理とや思ひけん、暫くの間は離縁を受けし良人の家に起伏して、時には機を織り、時には着物を縫ひ、又時には賃仕事などして、小遣ひ錢を貯蓄し居たるが、半年ほど經ちて足柄村の實家に去りぬ、お澤萬兵衛さま〳〵に引き止めたれど甲斐なかりき

栢山村二宮總本家

第十一章

（一）

服部家の家政改革は、まこと金次郎をして玉と爲すべき研磨なりき、この研磨に由つて栢山の玉は近郷近在を照らすべき光輝を出だしき、「どうぢや、栢山の金次郎見たか、水呑同樣の百姓で居ながら、御家老樣のお家を修めて、以前の立派なお屋敷に爲よつた、何んとまア豪い奴が出たでは無いか」とはこの界隈に於ける取沙汰なりき、評判なりき

金次郎の眞心なかりせば、服部家は退轉の悲みを避くること能はざりしならん、屋敷の松の色變えず、今も昔の翠を籠むるは云ふまでもなく金次郎のお蔭なり、この大恩忘却すべきにあらずとて、十郎兵衞は逢ふ人ごとに金次郎の誠意と、金次郎の人格と、金次郎の修養とを吹聽しき、今までは爲せる樹にてもあるまじく見えたるが、亭々として虚空遙かに聳ゆる如き巨松となりつ、今までは普通の草木の枝に咲く花と見えしが、急に芬々たる薫りを放

ちて、美しき色を朝日に輝かせぬ、足柄郡一對の村も郷も、小田原十一萬石の城中も城下も、みな金次郎の噂にて持ち切られぬ

されば金次郎の家の門前は、近郷近在よりせる村人をもて埋められき、或は訴訟の勝敗、或は紛紜の仲裁、或は廢家の再興、或は商賣農作の相談、大と無く小となく、悉く金次郎の思慮を借りる事となりき、改まりて門人となるはなけれど、栢山一村は云ふまでもなし、近村の人々、何れも金次郎を當代の智者學者として尊敬しぬ、

金次郎は急に巨人となれり、以前の如く農事に盡し、耕作につとめ、夜は縄綯ひ草鞋作り、晝は麥粉米粉を小田原の町に鬻ぎて、夜の目も寐ず稼ぎ勉むれど、色黒く固き身體に光りありて人の心を射る如く見えき

「其處へ行くは兄さんぢやないか」

小田原の役所に行きたる歸りなるべし、小紋の羽織を裾短かに着て、手に小さき風呂敷包みを持ち、小田原の町を出放れんとして、一歩前へ歩み行く二十五六の男を呼び止めしは、彼の竹松村の名主幸内なりき

「おゝ」と前なるは振り返りて「何處へ行かれた喃」

「今日はお役所へ出て、今歸る所ぢやが、兄さん、あなた栢山の金次郎さん知つてお在でか」

「名は聞いとるが、逢ふたことは無い」

「それでは一寸お逢ひなされませ、彼處へ行くのが金次郎樣でござります」

「彼の背の高い、紺風呂敷の包み脊負うた、あの男かの」

「まづ郡内での物識でござります」

「馬鹿を云はつしやい、二宮が何を知つて居らうぞや」

「いや、爾うではござりませぬ、第一が幼少の時親に別れて、親戚の家の厄介になつて居ながら、廢家再興遂に一人前の百姓になつたのでござります」

「その位のことは誰でもする」

「第二が服部十郎兵衛樣のお屋敷、千兩の借財を五年の間に返して……」

「それを云はつしやるな、耳に蛸が當つて居るわな」

「兎も角逢ふて御覧なされませ、私も近頃折々參つて、その話を承はります

が、何とも早や驚き入つたものでござります」

「甚う褒めるの」

「金次郎さんを褒めずば、世の中に一人も褒める人はござりませぬ、まづ呼び止めて見ませうの」と幸内は一反ほど駈け出して「金次郎さん〳〵、もうお歸りでござりまするかな」

(二)

「おゝ」と金次郎は見返つて「誰かと思ふたら幸内さんか」

「不思議な處でお目に掛ります、今日も御商賣でござりますかな」

「例の麥粉を賣りに參つた、あんたはお上の御用か」

「年貢上納の事に就いて、郡奉行のお手代衆へお願ひに參つたのでござります」

「あんたの村も凶作ぢやの」

「酒匂川の洪水が年々命を縮めるのでござります」と幸内はうしろから追ひ

縋るやうに誠にお氣の毒ながらちよと逢ふて戴きたい人物がござります」

「はて、誰ぢや」

「私の家内の兄、曾比村の廣吉でござります」

「うむ」と金次郎は快く、「劔持さんか」

「評判の粗放家でござります」

「劔持さんの事なら、私も噂に聞いて居る、何處にお在ぢやの」

「後から參ります」と幸内は振返つて「兄さん、早うお出でなされませ」

劔持廣吉はもと足柄郡牛島村に產れたるものなりき、親を草柳善右衛門と云ひしが、曾比村の劔持家に養はれて、養家の跡目を繼ぎたるなりき、百姓の家に生れて百姓の家を繼ぎたるなれど、居常學問の志厚かりしかば、或時は檀那寺の住僧に就き、又ある時は小田原の儒家を訪ひて、聖賢の道を研究するを樂みとしき、殊に劔持家を相續して荒物屋を始めたる後は、詩歌風流の道にも分け入り、佛典にまで指を染めて、村中第一の學者と呼ばるゝに至る、寛政十年の產れ、金次郎よりは十二の弟、當時二十一歲なりき

廣吉は極めて尊大なりき、村中第一の學者と噂せらるゝが、自慢の影となりてその隆き鼻の頭に閃めき、金次郎の事は他人の物語りに聞き居たれど、彼れ唯無學の百姓のみ、米搗臼に捉まりて僅に大學論語を讀みたるのみ、服部家の家政を調理して、その名を知らるゝに至りしは彼の僥倖なり、荒れたる家を掃除して、そこに住居を定むる如き、誰の手にても爲さるべし、事々しく賞揚すべき事かは、とは常々彼の思ひ居たる所なりき、然も彼は幸内の紹介に由り、名のみ高く、實は低き人物と卑み居たる金次郎と對面すべき事となりき、彼はまづ二人の側に近寄り、極めて冷淡なる挨拶を爲したるが、その目の中に輕侮の光りは滿ち渡りぬ

「お前さん、幾歳ぢや」

これ金次郎が第一の問ひなりき

「二十一歳ぢや」

「お若いの、ずんとお若いの」

これ金次郎が第一の挨拶なりき

「此からは私同樣御贔負なされて下さりませ」

と幸内は氣を揉むやうに云ひつゝ「兄さん折々お邪魔なされませ、金次郎樣のお宅へは善榮寺の金瑞和尚も行かれます、栢山の學者と評判される岡部善右衛門樣も行かれます」

廣吉はこれに答へなく、ぎろ〳〵とせる眼に絕えず金次郎を見詰め居たりき

「劍持さん荒物を渡世になさるさうぢや」

「農業の片手仕事でござります」

「笊をお賣りか」

「荒物は何んでも賣ります」

「笊は何處で能きるかの」

「まづ江戸製が第一でござりますな」

「江戸製の笊は何處の竹を用ひるの」

流石の廣吉もこの不思議の問ひに答うる詞は無くて、グッと唾を嚥み込み

ぬ、金次郎は他目も觸れず、直道に進み行く

「絕えず村の相談を受けますのでな、私のやうな者でも、床屋殿から片腕に賴むと云はれりや、捨て置く事も能きませぬでな」と廣吉は云解らしく云ふ

「お忙しいの」

「それに世話好きでござりまして、何にでも手を出されるのでござります」

と幸內は廣吉の詞の不足せるを補ひぬ

「飯も炊き過ぎると黑う焦げる、旨い料理も度を過ごすと不味くなる、古い發句に、咲き過ぎてこれさへ卑し梅の花、といふがある、御存じか」

金次郎の話はこれにて盡きぬ、その後は何事も語らず、栢山と曾比の岐れ道に手を別ちき、廣吉はほと吐息して

「初めて逢ふたが大分話せるな」

「どうでござります、捉へ處のない大きい人でござりませうがな」

「私は稽古した學者ぢやが、金次郎さんは自然の學者ぢや、私は學者や坊主に敎へて貰ふた學者ぢやが、金次郎さんのは自分で硏いた學者らしい、面白

さうな、これからちよこ〳〵尋ねて見やう」

此ぞ金次郎廣吉の初對面なりける、廣吉が金次郎の門人として、小田原附近の報德事業を助成せし最初なりける

（三）

金次郎の風聞は遂に領主大久保加賀守忠眞朝臣の御耳に入りぬ、忠眞朝臣は當時天下の執權職たりき、白川樂翁公の知遇を得て、第二の樂翁公と呼ばれたる賢君なりき、時弊を矯め、汚俗を洗ひ、萬民の心を安んぜんとするは、この殿の大主義なりき、遺賢を擧げ、善政を布きて、日本六十餘州を和氣駘蕩の中に置かんとはこの殿の大希望なりき

然も自己領內に二宮金次郎あるを聽き出されぬ、當代の潛龍は是なり、金次郎を拔擢登用して國政の一部を委ねなば、治績忽ち揚らん、とは老臣服部十郎兵衞その他より言上せる所なりき、されど仍容易に信用せられざりき、まづ目付役を四方に派して金次郎の素姓來歷を調べさせぬ

目付役の復命は何れも同一意味なりき、金次郎は第一に誠實誠意、第二に學問の志深し、第三に慈悲善根、第四に勇氣膽力、第五に精力根氣、第六に事務整理、是等みな非凡の事績あり、栢山を中心として、その周圍の村民、金次郎を各種各般の相談相手と賴み、利益を得たること莫許なるかも知れじ、農民の子には珍らしき者なり、農民の家には生れたれど、その魂には武士も及び難き處あり

忠眞朝臣はこの復命を聞かせて、直ちに登用拔擢せんかと思し召されたれど、一應は老臣重役の意見を聞くべき必要あり、由て日を期して一同を城中の大廣間に召し出だされぬ

席上の諮問案は云ふまでもなく金次郎登用の一議なりき、野に隱れたる賢人を擧ぐるは、此上もなき仁政なるべけれど、位祿の高下は一家風儀の根本なり、金次郎いかに凡人に脫出せる技倆ありとも、身分は卑しき一農民に過ぎず、そを直ちに拔擢して國家樞要の地に置かせんこと、餘りに遠慮なきに過ぎたり、申さば一家中の大事、尙十分に御思案あるべき事歟、と老臣の一部は主張しぬ

服部十郎兵衞及びそれに一味せる重役は、金次郎の大いに用ゆべきを說き、人間の階級は一家風儀の根本なりといふも、賢人は何日の世にも出づべきものにあらず、金次郎の聲名、今は殆んど他藩他領の村々にも喧傳す、萬々一他家より手を付けらるゝことあらばお家一期の耻辱、龍は到底池中の物にあるまじ、風雲の乘ずべき機會を與うるは、お家仁政の標榜、御當家安全の基なり、速かに御召し出し然るべし、と言上す

雙方の議論各々理りあり、忠眞朝臣は一應の意見を聞かせられたるのみにてその日の席を閉ぢられき、老臣重役一致して推擧するとあらば、直ちに登用の道を開くべき御心なりしかど、一方に有力なる反對者あるを見させては、容易く事も行はれまじ、金次郎いかに非凡の技能ありとも、家中に歸服せざるものありては、遂にその力を展ばす所あらざらん、如かず仍篤と思案し、篤と考慮したる後、金次郎に他の及ぶまじき功績を擧げさせ、一家中歸服の色動く時を見、彼を要路に引き擧ぐるとも、强ち遲きことはあるまじ、と早

速く思ひ付かせたればなりき

下野國櫻町に在所ありて、同國芳賀郡物井、横田、東沼の三村四千石を知行せる旗下に、宇津久太夫といふがありき、大久保家の分家なれど領内の政緩みて、人情極めて浮薄なりき、加ふるに土地極めて磽薄なりき、故をもて五穀乏しく、人氣放肆、無頼の徒横行跋扈すれど、領主に之を制すべき餘力だもなかりき、元祿年中までは戸數尚四五百戸ありしが、近年離散して今は僅に百四五十戸を餘すのみとなりき、然もその百四五十戸は互に小かなる利益を爭奪せる無頼の民なりき、公事訴訟を事とせる遊惰の人間なりき、田野は荒れて狐狸の褥すら寒く、山林は伐り盡して鳥の塒を定むべき枝すら無し、もしこのまゝに五七年を經過せば、櫻町の領内は殆んど廢絶し終るならん

これ忠眞朝臣の常々煩悶苦慮したまふ所なりき、金次郎もし絶大の技倆あらば、この領地、この人民を救助調理するならん、幸ひに金次郎よく櫻町領内の回復を爲し終らば、老臣重役みなその技能に敬服せん、その時は金次郎の價世に出づるなり、金次郎を拔擢して國政を委ぬべき機會到來するなり

金次郎は小田原城内に斯る評議ありとも知らざりき、櫻町回復の事委任の命、今しも頭上に落ち來るとも知らざりき、

(四)

金次郎はこの時已に後妻ありき、名を歌子といふ、隣村豐川村大字飯泉の人、父を岡田忠藏と云ひき、幼きより小田原の家中何がしの家に奉公したるが、學問の志淺からず、十三四已に四書を讀みきといふ、當時の婦人學問に志すは極めて少く、漢籍を讀むは更に稀なり、緣ありて金次郎に嫁ぎたる後は、野にも耕し、機をも織りて、忠實しく家業に勉めぬ、二人の間には早や彌太郎といふ子さへありき

「物申う」

「田舍家には珍らしき案內の聲なりき、折から中の間に手習ひし居たる富次郎出でゝ執り次ぐ

「金次郎殿は宅か、拙者は小田原の家中日下部春之丞と申すものぢや、君侯

の御用を帯んで參つた、ちよと御意得たい」
富次郎は委細を兄に云ひ入れぬ、金次郎は不審の眉を顰めながら、兎も角も客間へ通すべき旨を命じ、直ちに出でゝ對面しき、一應の挨拶終りて後、春之丞は詞を改めて
「今日これへ參つたるは餘の儀でない、其許幼少の砌兩親に死別れ、人間の身に堪へ難きほどの艱難辛苦を經て、一家再興の實を擧げられたといふ、殊には同藩服部十郎兵衛家道衰頽、已に一家分散の悲みを見んとするに至つた時、其許一遍の義に由て、五年の間の經營、悉く內事を調理せられたとある、いかにしても感ずべき仕方、君侯に置かせられても、殊の外御賞美の御模樣と見立て奉る」
領主よりの使者として、一藩の重役草深き田舍家を訪れるは、宛ら太陽の夜の暗を照らすが如く、夢にだもあるまじき事、もし普通の農民ならば同席も恐れ、仰いで顏を見るも恐れ、唯椽外に平伏して、畏み〳〵仰せを承はる外なけれど、金次郎の眼の中には、天下に誠あり、天下に公道ある外、人の

階級などは無かりき、人の階級は善く辨へたれど、誠實誠意の前に貴賤もなく貧富も無し、我は唯誠意人道をもて總ての物に對せんとは、彼の始めよりの理想なりき、彼の始めよりの主義なりき、故に領主のお使番筆頭たる日下部春之丞に對しながら、喜內善右衛門、もしくは道齋金瑞和尙に對すると同樣の態度なりき
「御口上却て恐縮に存ずる、私は天の理、人の誠に由て、人たる道の端を盡したに止り、決してお賞めを戴くほどの事とも覺えませぬ、花は春の惠みに咲き、人は誠の道を踏む、これは自然の理と申すものでござります」
「君侯深く御賞美の餘り、名主格に御登用の思し召しもあらせられる、これ然しながら其許農事出頭の德にも由る、これは近日郡奉行から沙汰ある筈ぢや」
「有難いことでござります」
「さて」と又詞を改めて、「其許へ御委任の事件がある、謹んでお受けさつしやい」

春之丞は具に宇津家の内情を語りぬ、具に櫻町領衰頽の狀態を語りぬ、彼はお使番中の辯者なりき、重役中の實務家なりき、從來幾度も君命を受けて、櫻町領内の狀況を視察調査したる事ありき、故にその說明は手に取りて其物を見する如く明瞭なりき

「表面の御知行四千石と申しながら、實の收入は僅か千八百石に足らぬ、それゆゑお手元の御難義、申さうやうも無い始末、從つて御領内百姓町人の難澁、目を當てゝ見ることも能きぬ、この御領内の興復、擧げて其許へ御委任あらせられうとある、お引き受け下さらうの、君侯破格の御登用、御見出しとあるに感泣して、さてお引き受け下されうの」

(五)

「平に御免を蒙りまする」

金次郎の返答は意外なりき、簡短なりき、然も極めて明白なりき

「お受けござらぬか喃」

春之丞は息を機ませぬ

「平に御辭退仕りまする」

「こりや心得ぬ、他は其許を藪田の中へ下りた鶴のやうに申すが、君侯お見出しあらせらるゝこの有難き恩命を他にして、櫻町興復の御委任をお受けせぬとは、案外のお詞ぢや、非凡の材を抱かれながら、何日まで百姓農民でお在での心ぢや、池中に潛む蛟龍も、風雲の乘ずべきが無くては昇天の機を得ぬ、其許いかに事務の才を持ちたまふとも、之を用ゆる棟梁なくては、遂に林野に朽ち果つる、まこと出世の機會ではござらぬか、まこと上もない時節到來ではござらぬか、平にお受けなされ」

「折角のお詞ではござりまするが、こればかりは平に御免を願ひまする」

「何うしてもお受けがない、何故ぢやの」

「私、百姓の家に生れて、百姓の業を致し居るでござりまする、殊に極貧難澁の間に成長したれば、之といふ學問を致したでもない、唯鋤鍬取つて田畑を耕し、米麥を作る外、是と取柄のある者ではござりませぬ、多年の勞苦空

しからず、漸く廢家を起しましたも、決して私の手柄と申すではござりませぬ、これは皆な先祖代々の餘德、お褒めに預るほどの事では無い、それが何としてお大名の御內繹調理、衰頽の御領內興復など、思ひ寄らぬこと、五貫七貫の重荷を脊負ふは、馬牛こそよくも致しますれど、猫や犬に負はせては一步も行きませぬ、重荷に潰れて二つとない命を殞すに至りまする、これは幾重にもお宥恕を願ひ上げまする」

「斯ほどに云ふを聽かぬと申すな」

春之丞はやゝ氣色ばみぬ

「唯御辭退申す外ござりませぬ」

「辱くも君侯の仰せとあるを、其許お聽き納れござらぬな」

「君命いかに重くござりませうとも、私一身を顧みまする、中々この重任をお受け申し上げることは能きませぬ」

金次郎の心は石にあらず動かし難かりき、斯く云ひ切りて後再び口を開かざりき

「斯くまで云ふてもお受けないとあれば是非に及ばぬ、歸りて此事君侯へ申し上げるでござらうと春之丞は早や中腰になりしが、更に金次郎の顏を瞻遣る如くにして「御後悔あるまいな」

「慮外を申しまする、私生れて三十三歲、まだ一度も後悔致したことござりませぬ」

「幾度云ふも無益ぢや、我等は一まづ立ち歸る」

「御使者御苦勞に存じまする」

これ金次郎が別れの挨拶なりき、春之丞は後に心を殘しつゝ去る

春之丞が忠眞朝臣への復命は何とかありけん、幾程も無く金次郎は農事出頭との故をもて、名主格仰せ付けられ、扶持三石を給せられて、苗字帶刀御免の身となりぬ、二十年前のぐるり一遍は村第一等の人物となり、更に村第一等の地位を得ぬ、土手坊主の身には光りさして、二宮金次郎の名は御領主のお手許まで響きぬ、彼が善右衞門の家より暇取りて歸る途中、憐れなる老爺より買ひ取りて、川緣に植ゑたる松苗は、早くも成育して、今は千歲の翠

色よく、亭々として朝日夕陽に繁り合ひぬ

されど讀者よ、金次郎はこの松よりも尙幾十段高かりき

（六）

文政六年は金次郎三十七歳なりき、年來勤勉、一面に慈悲善根、一面に家業出精、身を粉にして働きたる效果は空しからず、近村近鄕に亙りて多くの歸依信仰者を得ると共に、又數町の田地を持つ身となりぬ、前に彼の敵たりし貫四郎も今は老ひて彼の味方となりぬ、前に彼に一苞の米を穫させたる古堀不用の地も、今は一かどの良田となりぬ、春は景色調ひて、花の世界の梅より櫻に移る時なりき、金次郎は手づから奧の座敷を美はしく掃き淸めて、妻の歌子を招き寄せぬ、歌子の懷にはその頃三歳となりし彌太郎可愛らしく抱かれてぞありける

「時にお歌、今日はお前に改つて相談せねばならぬことがある」

金次郎はふッくりと肥えたる顏に笑を含みて云ひぬ、歌子は背高く、髮濃く、眼の色淸しき女房なりき、平生に比べて良人の素振のやゝ異り居れるに不審せる如く、彌太郎を膝よりおろして少しばかり身を前めたるが

「事々しう何の御相談でござります」

「他ではないが例の櫻町の一條ぢや、今年で三年、日下部殿ばかりも何十遍お越しなされたかも知れぬ、實は昨日も三幣彈正殿からお召しでのう」

「それで小田原へお越しなされたのでございまするな」と歌子は張のある聲にて云ひぬ

前妻おきのは花の如く美はしかりしも、心に張と意地なかりき、歌子はおきのゝ如く縹致好からねど、その廣く白き胸には、良人を思ふ一念の誠の漲りぬ、

「三幣彈正殿は殿樣のお側役で、小田原十一萬石の御家中に、一と云つて二と下らぬ派利き、それが昨日は私の前に手をついて、是非引き受けて呉れよと云はれる、私も身分不相應の大役、百姓の家に生まれたものが、お旗本衆の内輪へ立ち入るでも無い、幸ひに成就すれば父祖の名も揚るではあらうけ

れど、さほど出世の望みもないゆゑ、やはり當村の名主格、親子夫婦兄弟が打ち揃うて、今日を送るほどの幸福はあるまいと心得、三年の間詞を盡してお斷りも申したが、昨日ばかりはいかなことにも斷り切れいで、まづ家內とも相談、幼少の頃から何かにつけて厄介を掛ける道齋樣、金瑞和尙、善右衞門樣とも話し合ひ、追て御返答申し上げる旨云ひ置いて歸つたが、お前は何と思ふてくれるな」

「お受け遊ばすとも、お受け遊ばさぬとも、あなたのお心一つでござります、左樣な御大事に、女の口を容れる筈はござりませぬ」

「ぢやが夫婦は一體、一畝の芋を作るにも夫婦合體して耕作したのは、その出來榮えが自ら優れてある、況して是は命懸けの御用、お前の心に少しでも不足があつては、お引き受け申した處で成し遂げることは能きぬ、それでまづお前の思ふ處を聞いて見るのぢや」

「私はどうかしてあなたに男らしいお仕事がお爲せ申したうござります」

「然し歌子、御領主からお見出しに預つて、命懸けの仕事を引き受けるのぢや、

成る成らぬは私の心一つ、私の誠の厚い薄いに由つて決する事ぢやが、利欲の爲めに致すので無い事だけは切に申して置く、お前もそれはよく心得て居て呉れねばならぬぞ」

前妻のおきのに手懲りせる金次郎は、此事業の首途に際みて、歌子の心に十分の覺悟を與へ置かんとするなりき

「お詞まではござりませぬ、もし利欲の爲めに遊ばすものなら、外にまだお仕事はいくらもあらうと存じます」

「誠に爾うぢや、さらばそなたも私の仕事を助けて呉れるの」

「生死唯一つでござりまする」

「うむ」と金次郎は我意を得たるやうに莞爾と笑みて「生死唯一つ――その覺悟をもて、私の前途を見て呉れるか」

「私ばかりではござりませぬ、此處にも一個居りまする」

清しき中に慈愛の情の水と湛へられし眼を注ぎて、彌太郞を膝の側に引き寄せぬ、彌太郞は母と父とが前途遙なる事業の着手に潛心相談せる前に坐り

て、宛らその對手に加はれるが如く大人しかりき

「おゝ彌太郎、そちも此中に交るかの」

「お父樣お仕事の片腕となつて、働く時節がやがて參りますると、立派にお答へ申さぬかいの」と歌子は愛に堪へざるが如き態

「彌太郎が私の手助けするまでに、櫻町御領内に生え繁る雜草が苅りたいものぢや」

「今度は幾年ほどお要りでござりませうな」

「年を限る理には參らぬ、この前服部殿御家政を料理した時は、五年と期限を定めて掛つたが、今度は七年が十年、十年が十五年、或は一生涯をその爲めに費すかも知れぬ」と金次郎は太い息の下に云ふ

「それも致し方ござりませぬ、あなたお仕事のお方付き遊ばす時が、即てその御期限でござりませうな」

「そなた確と承知か」

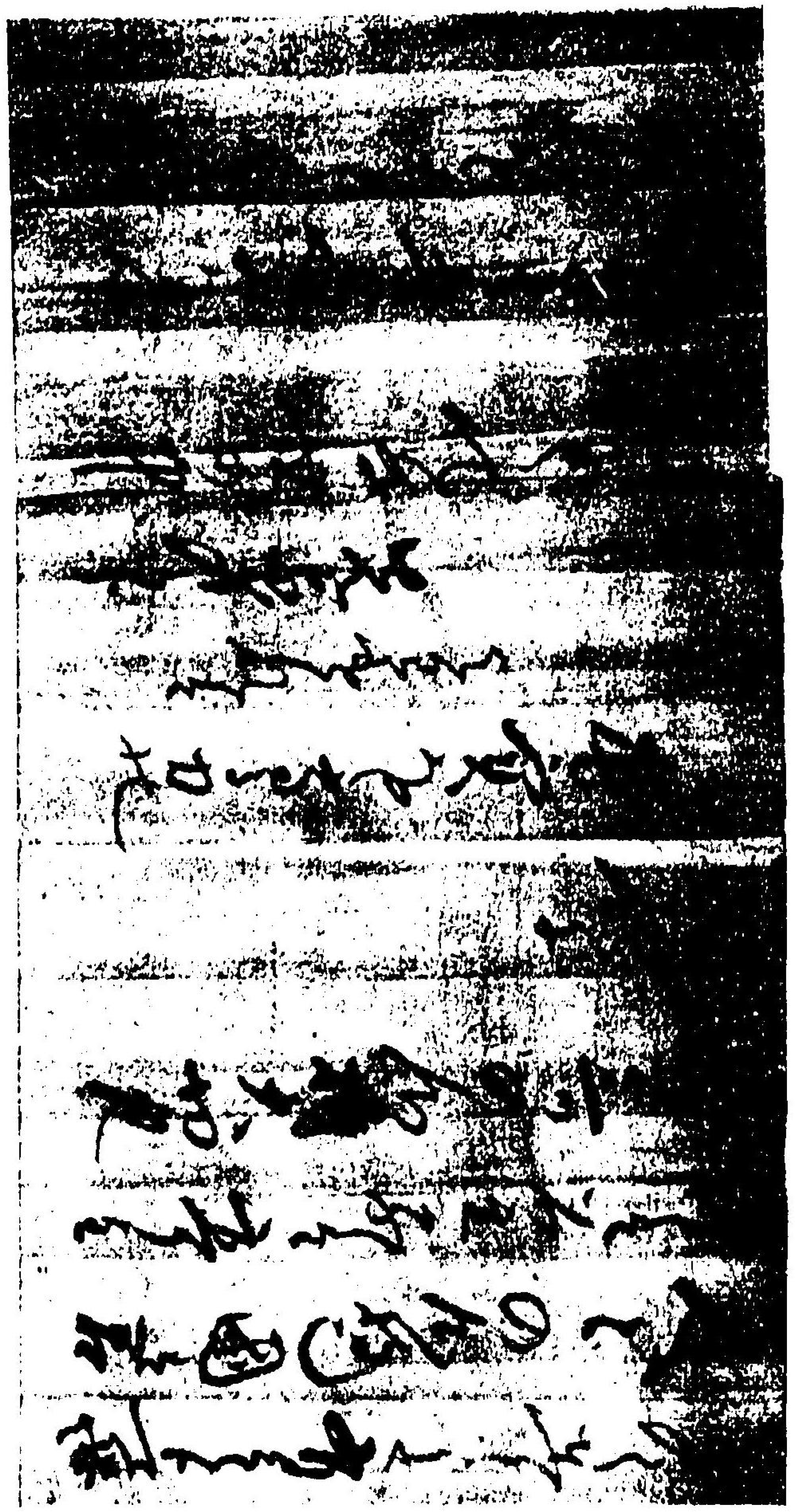
「酒匂川の水逆に流るゝ事ござりませうとも、この心渝る時はござりませぬ」

「諾し、さらば」と金次郎は詞に力を入れて「お受けの旨、三幣殿へ返答する」

（七）

金次郎は歌子の同意を得つるに勇みて、恩人道齋に相談しぬ、岡部善右衞門に相談しぬ、金瑞和尚に相談しぬ、劔持廣吉に相談しぬ、その他の交友知人に相談しぬ、然も皆な十分の同意は無かりき

廢たれたる家を是までに興して、數町の田地も求め、苗字帶刀をも許され、村中第一の巨人として近郷近在に其名を知らるゝに至るまでは誠に容易の業にてもあるまじ、基礎已に定まりたる上は、こゝに晏居して子孫の計を巡らすこそ人情の極みなるべきに、二十餘年苦辛の蹟を擲ちて、難に他國に赴かんとするは策の得たるものにあらず、家には妻子あり、土地には先祖の墳墓あり、自己功名の爲めに孝を缺き、慈愛を捨てたりと云はれんは、今日まで研き成したる璞を、自ら瓦礫の中に投ずるなり、君名いかに重くとも、百姓



二宮翁手蹟の一節

には百姓の守るべき分度あり、速かに辭退すとも、又は事情を申し述べて幾年かの猶豫を乞ふとも、兎に角家に取り、身に取りての一大事なり、猶よく分別なさせたまへ、と云ふ

されど金次郎は自己功名の爲めに、この難事を引き受けんとするにてはあらざりき、彼は假令何人の不同意あらんとも、唯一人の妻の同意を得たるに滿足して、先祖の地を去らんと覺悟しつるなりき、由て翌日三幣彈正と、日下部春之丞とに宛てゝ、年來の御懇命謹んで拜受し奉る、されど櫻町は名に聞きたるのみ、夢にだも野州の地を踏みたる事無し、由てまづ單身彼地に赴きて、土地衰頽の原因、風俗遊惰の根本、併せて地理人情の末までを見分研究し、私の力にて興復の大業成るべきか成るまじきかを深慮熟考して後、改めて御受け仕るべきか否なかを奉答せん、此儀御聽許なるまじとあればそれまでの事、偏に御執成を願ひ奉る旨、細々と申し納れき

云ふ處理りあり、彈正と春之丞とは直ちに金次郎申し出でを言上す

忠眞朝臣は委細を御聽かせありて、有理の願ひ、直に土地を見分して、思

部は主張しぬ。

服部十郎兵衛及びそれに一味せる重役は、金次郎の大いに用ゆべきを説き、人間の階級は一家風儀の根本なりといふも、賢人は何日の世にも出づべきものにあらず、金次郎の聲名、今は殆んど他藩他領の村々にも喧傳す、萬々一他家より手を付けらるゝことあらばお家一期の恥辱、龍は到底池中の物にあるまじ、風雲の乘ずべき機會を與うるは、お家仁政の標榜、御當家安全の基なり、速かに御召し出し然るべし、と言上す

雙方の議論各々理りあり、忠眞朝臣は一應の意見を聞かせられたるのみにてその日の席を閉ぢられき、老臣重役一致して推擧するとあらば、直ちに登用の道を開くべき御心なりしかど、一方に有力なる反對者あるを見させては、容易く事も行はれまじ、金次郎いかに非凡の技能ありとも、家中に歸服せざるものありては、遂にその力を展ばす所あらざらん、如かず仍篤と思案し、篤と考慮したる後、金次郎に他の及ぶまじき功績を擧げさせ、一家中歸服の色動く時を見、彼を要路に引き擧ぐるとも、強ち遲きことはあるまじ、と早

欠

MISSING

「それは何よりもお芽出度いことでござりまする」と歌子は取り敢ず祝儀を述べて「何の用意もござりませぬが、例の御膳部調理してござります、すぐお召し喫り遊ばしまするか」

「膳も膳ぢやが、さし當る用向から語つて置かう、櫻町出發の事は、今善榮寺のお墓へ參つて、お父様お母様御先祖御代々へお話申して來た、皆様御不同意はあるまいと信じる」

「お父様はさぞお歡びであらうと存じまする」と云ふ中に歌子は少しばかり膝を進めて「殿様數度の御懇命、あなたも彼地御檢分、三年の間御思案を爲させられて、漸うお受け遊ばした御事業、萬々一の懸念にも及ぶまいと心得まするが、物は念にも念を入るゝものと承はつて居りまする、あなた御心中に確とした御仕法御定めでもござりませうな」

「相役には三幣彈正、彼の人を申し受けた、呑鬼殿なら、私の片腕にきつと爲る」

呑鬼は彈正の通稱なりき、彼の才幹、彼の智謀、彼の世務に長じたる事は、

第十一章

歌子も又疾より噂を聞き居たりき

「三幣樣御同道、お手傳ひを爲させらるゝでござりまするか」

「堅く契約して參つた、呑鬼も一生懸命ぢや」

「さらばお二人で殿樣お頼みを、お遂げ遊ばすでござりまする喃」

「いや、呑鬼は私の片腕ぢや、唯片腕として伴れる、總ては私のこゝから出るよ」と我と我胸を指しつゝ「ぢやが容易ならぬ仕事ぢや、先日も彼地へ參つて檢分するに、御領内の村々は茫々たる草原同然、それに住居する百姓町人、何れも姦佞邪智の輩か、もしさも無くば自立の道も立てかねる老人子供の寄合ぢや、彼の土地を回復するは、恰ど禿山に樹を植ゑて、それを上林同樣に繁茂させやうと望むのぢや、いかな智謀發明の人物でも、容易の業で爲し遂ぐべき事で無い、ぢやが心なき草木も人間の至誠には必然感ずる、身命を塵芥のやうに抛ち、唯赤誠をこれに注いで、一方には土地を拓き、一方には民を撫でゝ、一念再興のことに當らば、望みを遂ぐる日は必ずあらうが、唯こゝに一つ悲しいことがあるのぢや」

「あなた御身に、そりや何事でござりまする喃」と歌子の聲は曇りて聞こえぬ

「父母御雙方、且は御先祖代々の御墓に離れて、遠隔の地へ去ることぢや」

「然し、やがては御歸らせの日もござりませうと……」

「私は再び歸る心がない、今日この地を去れば一死以て事に當る、御先祖御代々には永別の覺悟で居る」

「えゝ」と歌子は流石に驚き、「愈よその御覺悟でござりまするか」

「私はそれのみ念とする、幼き時父母にお別れ申して、人間の身に二人とはあるまじき難儀苦勞を經、漸うこゝまで成り上つたも、歸りは父母御先祖の御靈魂を安んぜんと思ふからぢや、それにまだその望み十分の一百分の一を遂せず、君命の重きに從いて、遠くこゝの村を去らうとする、世にこれほどの不孝はあるまい、私はこの事を思ふが爲め、三年の久しい間、辭退の詞を盡したが、いかにしてもお聽き入れがない、さほどの仰せを背き奉るは不忠、父祖代々に孝を盡さうとすれば忠義に缺け、君に忠義を致さうと思へば孝道

に缺くる、私は忠孝二道の岐れ路に立つて、三年が間考えた上、遂に君命の重きに從ふた、ぢやが亦退いて思ふと、忠孝に二つはない、君に忠なる所以は即ち親に孝なる所以、親に孝なる所以は即ち君に忠なる所以ぢや、すれば君命に由て此地を去るを、父上お怒りはあるまいかの」

金次郎は一念こゝに思ひ至るごとに、忠孝二道を全うする術なきに煩悶し、君命を奉じて櫻町回復に手を着くべく覺悟しつゝも、尙父祖の地を遠くに去るを、此上も無き不孝にてはあるまじきかと懸念するなりき、歌子はよく良人の心を知る、彼女は打ち笑みながら顏を見上げぬ

（十二）

「恐存を申し上げますする、お詞の通り忠孝はもと一つ、君の仰せでござりませぬ中は、御先祖代々に事へ奉るを孝行の第一とは致しますれど、殿樣御見出しに預らせて、百姓を安んぜよとの御懇命を得させた上は、一圖に君命を奉じたまふが、御孝行の道かと心得ますする」

「おゝ」と金次郎は膝を拍て「そなたも爾う思ふか」

「たゞ財を積んで、家の富を見るが、孝行ではあるまいと存じます」

「私の心も同じぢや、百人の心を安んずるは千兩の財を積むに優り、十町の荒田を拓くは、百町の上田を購ふにも勝る、私の心はいよ〳〵決した」と金次郎は晴々したる聲なりき

「そのお祝ひに………」と歌子は云ひかけて起ち上る

「何れへ參る」

「お銚子持つて參りますする」

「まづ待て、祝ひの酒はも少し後ぢや」と金次郎は重い調子、歌子が再び坐に着くを待ちて「斯ほどの大業、尋常一樣の事で成し遂げらるゝ筈は無い、由て先日も申し聞ける通り、家を捨て、相續の道を捨て、身を捨て、命を捨てゝ、專念櫻町回復の事を成し遂げうと存ずる、されど是は男子の仕事、女のお身の解得することではない、がお前も武士の釜の湯を呑んだ身ぢや、私と共に千辛萬苦して君命を辱しめぬ心なら、櫻町へ同道せよ、なれど樂を願

ひ、艱苦を厭ふ心、その胸に露ほどあらば、同道して益がない、由て今すぐに離別する、彌太郎は私の手で如何やうにも育て上げる、速かにこゝを去れ」

金次郎は儼然と云ひ切りき

「これは異なことを承はりまする」と歌子の目は涙に光りて「女子の身の效なさ、一たび歸れば二たび歸る家は無いでござりまする、生きるも死ぬるも、あなた御心に從ふこと、實家の門を出るからの覺悟、唯今も微塵渝ることござりませぬ、あなたもし水の底へ入りたまはゞ、私も入りまする、あなたもし火の中を探りたまはゞ、私も探りまする、まして百姓の御身に君の仰せを受けさせられる、あなたの譽れは私の譽れ、あなたの御榮達は私の榮達、あなたの御艱難は歸りは私の艱難でござりまする」

「きつと喃」

「私もあなたの妻、彌太郎の母、榮利を願ふて艱苦を厭ふものではござりませぬ」

剃り落したる眉痕に、決心の色漲り見えき、金次郎は頷きて、

「諾し、さらば召し伴れる」

「有難うござりまする」

「酒の用意、三郎もこれへ呼べ」

歌子は心得て去る、彌太郎は美しき繪雙紙に餘念なかりき

金次郎は少量の酒を好みき、然も女の酌ならでは飲まざりき「酒の酌は女に限る」とは彼の常々云ふ處なりき、歌子が用意の膳部に對ひて、歌子の酌に舌鼓打ちつゝ、櫻町出發に於ける家の處分を付けたりき、卽ち本宅に三町餘の田地を添へて、三郎左衛門に與へたる他は、二十年餘の苦辛經營に成りし、諸道具、調度、衣服を悉く他人の手に賣り拂ひぬ、然もその賣上代金は櫻町回復の資本金なりき

金次郎が櫻町出發の事を聞きて、多くの知己、多くの友人、多くの親戚はみなそれ〴〵暇乞ひに來りたれど、その朝國府津まで見送りたるは弟の三郎左衛門のみなりき、三郎左衛門は脊に彌太郎を脊負ひつゝ、兄が名譽の首途を送るべく、江戸近くまで行かんと云ひしを、金次郎は儼然に遮りつ、

「何處まで來ても同じぢや、もう歸れ」

三郎左衛門は兄に對して羊の如く柔順なりき

「それでは彌太郎を何う致します」

「彌太郎は私が脊負ふ、さ、此方へ來い」

金次郎は彌太郎を三郎兵衛門の脊より取りて、その身の脊に負ひたりき日は麗に照りて、富士が嶺高く西に聳え、足柄山の翠、その勇ましく光輝ある行を送るが如く見えき、

金次郎は並木松に朝日照りて、道芝の露まだ乾ぬ道を、歌子と伴れ立ちて徐かに歩む、そを彼方の松の樹蔭より懐しげに見送るは三郎左衛門なり

これ文政六年六月なりき、金次郎が功名の途につく第一歩なりき、東海道を江戸に出で、直ちに野州櫻町に向ひて下る、金次郎夫妻が櫻町を去る二里餘り谷田貝驛へ到着せるは、栢山を發足せる五日目なりき

谷田貝驛へは櫻町より庄屋ども兩三輩の出迎ひありき、金次郎櫻町に着して如何なる回復方法を立つべき、この難關は金次郎が玉となるべき問題なり、

金次郎の身に金剛石の光り發はるべき問題なり

然も障害は河原の礫の如く横はる

二宮尊德前編終

左の數通は家庭學校長留岡幸助氏の著者と發行者に與へられたる書翰なるが以て同氏が如何に本書の著作に助力せられたるかを知るに足るべし

其の一

拜啓仕候陳者留岡君には此度二宮翁に關する小說なるものせられ候由誠に喜ばしきことに候就ては小生蒐集の材料貸與方御申越し被下候處小生所有のものは小說中の材料としては如何のものかと存し候それ等の材料としては月餘にして出版相成り候。「二宮翁逸話」は好材料と被存候此書には小說結構に必用なる材料多く有之候間自由に御使用被下度候然し警醒社書店より出版致すものなれば引用書目丈は御明記被下やう願上候右の次第なれば小生材料を惜むにあらざれども小說中の材料としては小生所有のものは風強のものに無之且つ翁の傳記は小生一生の一事業たれば今尙材料を蒐集中に候同書は十年以後ならでは筆を下さゞる考に候故に左の書目を推薦仕候。

○二宮翁夜話　福住正兄著

○報徳記　富田高慶著

福住正兄著
○二宮尊徳翁略傳（漢文）

岡田良一郎著
○二宮大先生傳記

此頃出來しもの

吉田宇之助著
○濟民記

此は相馬藩政改革の始末及富田高慶と二宮翁との關係を知るによろしく。

○二宮翁道歌集

拙　著
○二宮尊徳と其風化

拙　著
○農業と二宮尊徳

拙　編
○二宮翁と諸宗

拙　編
○飯持廣吉と二宮尊徳

此はよく讀めば材料多く有之申候

○肖像　は拙著「風化」の中にあるもの最も正確に近きものと存候

○以上の材料の外には實地栢山村小田原附近を跋渉せらるゝ方可然と存候
御必要なれば小生添書を差上げ可申候
且つ小生の如きものが御著述につき相談相手になりてよろしければ喜ん

で御助力可申上候。

右は氣付たるまゝを申上ぐることにて後便更に好案あれば可申上候。
留岡君には未だ拜芝を不得候得共是非執筆せらるゝやう御傳へ置被下度出來る丈の聲援は喜で可致候右御返事まで　早々不具

明治四十一年八月十六日　　留岡幸助

山田太一郎様　玉机下

（右は發行者より愛知縣農會雜誌主幹山田天涯氏を介して助力を乞ひたる返書なり）

其の二

拜啓仕候過般小生不在中御來訪被下候處往違つて御目にかゝらず失禮致候「渡邊華山」五部御惠贈被下候處最早讀了致候御高志の段難有奉謝候。

「二宮尊徳」

第一章閲讀愚見申送りおき候何百頁に相成り可申や全體の結構上のことも略承りおき度此事も直接に申送りおき候小生の及ぶ丈は力を可盡千古に殘るやうなる「小說」と致度候尚々充分力を込められ候やう大兄よりも御申込おき被下度候原稿は大兄の手を經て作者へ返却致度一應御覽被下度候　早々不具

十月二十三日　留岡幸助

與耳琢堂　玉机下

其の三

拜啓仕候翁の思想は凡て大學論語によること明かなりと雖孟子の語は一度も引例又は云々致せしことなし翁は「我道は至誠と實行とのみ」と申して議論と說述とを好まざりし孟子は少しく論客の氣味あるを以て孟子の言を取らざりしにもよるべきか故に「口に孔子や孟子の教」云々の孔子はよけれども孟子は避ける方宜しかるべしと存候

此篇翁の主義思想を發揮して筆先鳴動するの感あり面白く有益に拜見仕候。

十一月十二日　留岡幸助

碧瑠璃園君　硯北

其の四

拜啓仕候御送付被下候原稿拜讀中二宮翁岡部善右衛門氏に屈男として所望せられ居候所へ讀み到ると恰もよし一通の郵書相山村岡部善右衛門氏より參り候故披見候處左の如き文面にて餘りの奇遇故かき拔きて御覽に入れ候。

拜啓仕候御高堂益々御清福奉大賀候。

却說昨年中は種々御手數煩し御無禮の段平に御用捨被下度候就ては茲に封中致し候品は數年前遠州豐田郡豐西村中善寺松島吉平氏に御預け置き候二宮翁御着用の鶉毛織羽織の小切に御座候間誠に少々には御座候得共御禮の印まで進上仕度御受納被下候得者誠に難有仕合に御座候。

右之品私宅にて所持せし理由申述候私事は誠に不幸續きにて借宅住の貧民に御座候得共今より六十三四年前に死去せし私の祖父善右衛門は村內にては有名の學者にして相當の財產も有之下女下男を使ひ村民を集めて學問を教授致せし事にして其時代二宮翁には二十二三歲の青年にて下男を兼學問修業の爲め兩三年間祖父善右衛門に使れたる事に御座候此の羽織元は相馬樣より二宮翁に下されし品に御座候二宮翁老年の折湯本の福住宅へ御來遊に相成り其節使を以て祖父善右衛門を御招きあり翁には青年の折に學問教授せられたる御禮として祖父善右衛門に下されし品に御座候右の次第は今より三十七年前死去せし亡父よりの遺言にして私僅かに承知いたし居候。

十一月二十五日　部善右衛門

留岡樣

右御參考の爲に書き添へ候小生こと來月二十日前後貴地に二日間斗り滯在の考なれば御目にかゝり度願居り候。草々不具

十一月二十八日　留岡幸助

碧瑠璃園君　玉机下

而して留岡氏が終始著者に助言を與へ且つ原稿の校閲に從はれたるは發行者の深く謝する所なり。

明治四十二年一月二十日印刷
明治四十二年一月廿四日發行

定價金八拾錢

著作者　碧瑠璃園
發行者　名古屋市東區呉服町二丁目百一番地　與良松三郎
印刷者　東京市京橋區南小田原町二丁目九番地　淺野榮作
印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社

發行所　名古屋市東區呉服町　與風書院
發賣元　大阪市北區東梅田町　盛文館
東京市神田區表神保町　東京堂

63
39

63
39

094840-001-5

63-39

二宮尊徳

碧瑠璃園／著

前

M42，43

DBQ-2421